HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	纂訳と文体：『小説神髄』研究 (六)
Author(s)	亀井, 秀雄
Citation	北海道大學文學部紀要, 40(2), 1-59
Issue Date	1992-02-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33588
Type	bulletin (article)
File Information	40(2)_PR1-59.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

纂訳と文体

――『小説神髄』研究 (六)――

亀井秀雄

序　特異なテクスト

龍渓矢野文雄纂訳補述『斉武名士経国美談』は、今日からみて三つの注目すべき特徴を持っている。

一つは纂訳補述と銘打っていたこと自体にかかわるが、かれは前篇（明治一六、一八八三年）では具朗社（George Grote）以下八人の古代ギリシャ史、後篇（明治一七年）ではさらにセノホン（Xenophon）とプリューターチ（Plutarch）の著述も参照して、斉武（Thebes）興隆の歴史を記述し、しかも本文においてはその典拠を一いち明記していたことである。ある著述の全部または部分をほぼ原文に即して日本語に移し変えるという意味での、これは翻訳ではない。しかしまたこれら十種類の古代ギリシャ史を文献とみて、自分なりに入手した別な資料によって比較検討批判をしながらより科学的に正確なセーベ史を目指したわけでもない。英語で書かれたそれらのギリシャ史から「事実」を摘出し再構成したものを日本語で記述したが故に、纂訳とことわったのである。ばかりでなく、それらからだけでは見え

て来ない事件の経過をかれは想像をもって補い、これを補述と呼んだ。この二面はそれぞれ前篇の凡例で言うところの「正史」と「小説体」とに対応する。「此書ハ希臘ノ正史ニ著明ナル実事ヲ諸書ヨリ纂訳シテ組立テルモノニシテ其ノ大体骨子ハ全ク正史ナリ」「書中ノ事柄ハ遠キ古代ノ事柄ニシテ諸書ヲ捜索スルモ断続シテ詳ナラサル所アリ因テ之ヲ補述シ人情滑稽ヲ加テ小説体ト為スニ至レリ」と。

その点ではかれもまた、馬琴から逍遙を経て現代の小説家にまで及ぶ正史実録と小説稗史、あるいは歴史と小説の問題に直面していたわけだが、いま特に注目したいのは、断続する「事実」を補う想像力をけっして文学的創造の根拠として意味づけるようなことはしなかったことである。まして歴史と小説との関係を事実と真実との対立にすり変え、その真実の裏づけを作者の「内面」に求めるような現代文学者の固疾に、かれはまだ冒されていなかった。これはかれが自分を第一義的に文学者として規定してはいなかったことと関係する。かれ自身の自覚のなかでは、このような著作は政治家の余技以上ではなかった。「世人動モスレハ輙チ曰フ稗史小説モ亦タ世道ニ補ヒアリト蓋シ過言ノミ若シ夫レ真理正道ヲ説ク者世間自ラ其書アリ何ソ稗史小説ヲ仮ルヲ用キン唯身自ラ遭ヒ易カラサルノ別天地ヲ作為シ巻ヲ開クノ人ヲシテ苦楽ノ夢境ニ遊ハシムルモノ是レ則チ稗史小説ノ本色ノミ」（『経国美談』前篇自序）。この言葉を『経国美談』全篇にかかわらせてみればさまざまな含みが生れてくるはずだが、少くともこのように言い切った時、かれは、馬琴や為永春水のように勧善懲悪で自分の読み物を正当化しなければならぬ戯作者意識や、近現代の作家のごとくアプリオリな美学概念や想像力理論で小説の自立を根拠づける芸術家意識などには囚われない位置に立っていた、と言えるであろう。自由民権運動の啓蒙的な補助手段としてさえも意味づけていなかったのである。これほど解放された意識で小説をとらえた発言は前例もなければ後例もない。だからこそかれは、自分独自の視点とか歴史

認識とかいう、オリジナリティやプライオリティの色気にわずらわされずに、その記述がどんな先行テクストに負っているかを明記し、またその反面、その想像力の源泉を自分の「内面」に強請したりすることなく、「人情滑稽」を主眼とした近世以来の「小説体」に求めることが出来た。その結果作家の創造力と作品の自立という近代主義的な「作品」観からはみ出し、これを打ちこわして新たなテクスト論へと私たちを誘う文章を残しえたのである。

ところがこのテクストの奇妙な、そしてこれが第二の特徴と言えるのだが、必ずしも右のような発想をすんなりと受け容れたわけではない読者をそのなかに内包していたことである。

龍渓矢野君嚮著二一書一、名曰二経国美談一。自序云稗史小説猶二音楽画図一、此著亦然矣、固不レ過レ為二遊翫之具一、人或曰稗史小説亦有レ補二於世道一、是過言耳。余跋レ之云、此書於レ君固講文之余戯[註一]、然其有レ補二於世教人心一与二泰西諸大家小説一何譲焉。（中略）雖レ然経国者人生之大業、非レ冠二尋常遊翫書之字一也。一部史談既名レ以二経国一、則可レ知書中所レ叙非二尋常小説家之言一[註二]。（中略）此書雖レ謂二遊翫之具一、其所レ説無レ非二経倫之資一[註三]、況其結構雄傑謂二凌二駕泰西諸大家一或無レ不レ可。（返り点と句読点は引用者）

これは藤田鳴鶴が後篇に寄せた跋文の一部分で、あえて長く引用したのは註で示すごとく岩波文庫版の訓読に疑問があるためであるが、ともあれこのように政治小説の流れのなかでとらえるのが一般であった。鳴鶴はおそらく丹羽純一郎訳の『欧州奇事花柳春話』や服部撫松纂述の『泰西活劇春窓綺話』などを念頭に置きながら、構想の大きさや、ヨーロッパの政体や世相風俗、人情を巨細に描き出した点で、泰西諸大家の小説と較べていささかも引けを取るものではない

と評価したのである。しかもこの鳴鶴の他、栗本鋤雲と成嶋柳北の三人が、本文の各回の末尾に短評を加えていた（後篇では依田学海が成嶋柳北に代っている）。龍渓が成稿を印刷にまわす前に、かれらの批評を乞うたのであろう。序文や跋文を寄せることは当時はむしろ一般的だったが、このように各回ごとに尾評が附されるのはわが国のテクストでは珍しい。これによって私たちは当代の読み巧者とも言うべき代表的な文人ジャーナリストの小説観を窺うことが出来るわけだが、それとともにもう一つ注意すべきは、一般の読者に働きかけたそのテクスト的機能である。読者は各回ごとに読みの持続性を中断され、この内包された代表的な読者のコメントに直面して、自分の読みの反省を強いられる。これは物語の享受にとって苦痛な足踏みとも言えるが、そのコメントとの対話を通してお互の読みを相対化し、新しい読みを発見する楽しみを持つことも出来る。このようにしてより深層の意味を見出したとき、かれらのコメントは一方では物語の外側から加えられた批評でありながら別な面では物語内容の一部分としても機能することになる。そういう共同作業的な読みの生産を促している点でもこれはきわめて特異なテクストだったのである。

そして第三の特徴は、これも第一の特徴にかかわることであるが、その文体についても十分に意識的だった点を挙げることが出来る。かれの文体観は「文は人なり」という格言に象徴されるような個性的人格観によるものではなかった。「今ヤ我邦ノ文体ニ四種アリ、曰ク漢文体ナリ、曰ク和文体ナリ、曰ク歐文直訳体ナリ、曰ク俗語俚言体ナリ、而テ是ノ四種ノ者各長短ナキ能ハス、概シテ之ヲ論スレハ、悲壮典雅ノ場合ニ宜シキ者ハ漢文体ナリ、優柔温和ノ場合ニ宜シキ者ハ和文体ナリ、緻密精確ノ場合ニ宜シキ者ハ歐文直訳体ナリ、滑稽曲折ノ場合ニ宜シキ者ハ俗語俚言体ナリ」（後篇自序）。かれは同時代の文体混乱状況をむしろ新しい文体の創出の条件ととらえ返し、叙述の対象や内容に適合した文体を併用しながら、しかもそれらの異質性を感じさせずに統括できるような「時文」（時流にかなった

文章）を作り出そうとしたのである。大まかに言えば、それは英語の古代ギリシャ史を纂訳する場合の漢文体や欧文直訳体と、想像で補述する場合の読本や滑稽本の文体との使い別けであり、前回に取りあげた服部撫松の『春窓綺話』のような、漢文書き下し文に和文体の傍訓（ふりがな）をからませた文章の次の段階の表現実験だったと言える。ばかりでなく、その纂訳の場合は翻訳でもなければ自分固有の判断認識の表現でもなかった。両者の中間的な文章だった点でも注目されねばならない。時代はすでに言文一致論が世論と化しつつあったのだが、かれはほとんど関心を示さなかった。

「然レモ一種ノ器械ヲ専用スルハ四種ノ器械ヲ兼用スルノ利ニ若カサルハ世上普通ノ道理ナレハ行文ノ間粗ニ入リ精ニ入リ微ヲ究メ妙ヲ尽スノ便ハ四体兼用ノ時文ニ超ユベキ者ナキヤ明白ナリ。刀鋸斧鑿ヲ兼用セス唯一器械ヲ以テ巧ニ什具ヲ制スル者アラハ人皆其妙技ヲ賞セン。然レモ此レ唯其ノ能クシ難キヲ能クスルノ芸能ヲ賞スルニ過キサルノミ」。これは先ほどの四種類のうち一種類の文体のみに固執する者を批判した言葉であるが、言文一致体のみで森羅万象を言い表わそうとするような主張に対しても同様な見方をしたことであろう。

この判断は口述筆記と無関係ではなかったと思われる。ただこの問題はすでに別稿[註四]で検討したことなので、重複を避ける形でふれておけば、前篇のような普通の口述筆記にせよ、後篇のごとく当時注目され始めた速記術を実験してみた場合にせよ、客観的には話しことばをそのまま文字に移したように見えるわけだが、これを龍渓に即して反省してみるならば、その語りはあらかじめかれのなかで文章として整えられていたものだったはずである。その文章はけっして一様ではない。これもすでに本論でふれたことだが、当時の文体はジャンルごとに別れており、その意味での多様な言説空間を志向しながら頭のなかで整えていたにちがいなく、この志向性を整理してみれば先ほどのような四種類の文体となる。その意味で四種類の混用とは四つの言説空間への働きかけ、あるいは四つの言説空間の統合の試

みにほかならなかった。それが龍渓の考えるポピュラリティの条件だったのであろう。この立場からみればいわゆる言文一致体とは、すでに内的に志向された文章を前提とする点でむしろ「言」を「文」に従わせるものでしかなく、しかもそれだけに固執することは多様な言説空間を均質化し、かえってその奥行きと拡がりを見えなくさせてしまいかねない。じじつ言文一致体が一般化して以来、日本の小説は急速に他者の言説への洞察力と構想力とを失ってしまったのである。

さて以上の指摘から分かるように龍渓の『経国美談』は、これまで私が本論で関心を向けてきた正史実録と小説稗史、翻訳と文体などの問題を集約的に担っている、希有なテクストであった。政治小説としての寓意性の問題もかかわっていることは言うまでもない。この『小説神髄』研究の中間の締めくくりとして、今回これを取りあげる所以である。逍遙は『小説神髄』で『経国美談』に二度言及しているが、明治一九年の再版では一度目の言及を削除してしまった。この間の評価の変化も重要な問題だが、そこに関心を限定するのでなく、『経国美談』の全体から読み取られる諸観念を復元し、それと『小説神髄』との類似や相違点をとらえることでおのずから後者の特徴が浮び上ってくるだろう。それを遠い目標としつつ、取りあえずここでは『経国美談』に関心を集中しておきたい。

第一章　纂訳の方法

龍渓が記述の根拠を示す仕方は、例えば次のごとくであった。

此ノ老執事ハ更ニ言葉ヲ改メテ言ヒケルハ

私事ハ御先代彼方倶君ノ御時ヨリ愛顧ヲ蒙リ久シク御当家ニ御奉公致セシカ（中略）郎君ハ何事モ御先代ヨリハ遙カニ優リ給フ如ク申セトモ唯御家計ノ一事ニ於テハ幾分カ劣リ給フ如ク存スル事モ尠カラス其ノ子細ハ郎君ノ余リ慈善ニ過キ給ヒ他人ニ施捨スル事ノ多キヨリ御家計ニ差響キヲ生スル程ニハアラ子トモ御先代ニ比較スレハ早ヤ余程ノ財産ヲ減ラシ給ヘリ願クハ此ノ后ハ少シク尊慮ヲ止メラレンコトヲ（ニノ一節ハ須氏ノ希臘史）又国中ノ名門大族ヨリ御家ト縁組ヲ願フ者少ナカラ子トモ未タ是マテ一モ御承引ナク独身ニテ過キ給フハ誠ニ心細ク存スルナリ（後略）

ト若キ主人ニ忠告スルハ老ノ常トソ知ラレケル主人ハ面ヲ和ケ之ヲ慰喩シテ云ケルハ

如何ニモ施捨ノ為メニ幾分ノ家産ヲ減セシナルヘシ然レモ余ハ家産ヲ濫費スル者ニ非ス唯癈疾孤寡ノ如キ自ラ衣食スル能ハサル者ヲ賑恤セルノミト覚ユルナリ余等ノ如キ肢体強健ナル者ハ財産モ然マテ其ノ身ニ急ナラサレハ賑恤ノ為ニ少シク之ヲ減セシトテ然マテ憂ルヿハナシ又斯ル事ニ施捨スルハ地下ノ祖先モヨモヤ不埒ナリトハ思ヒ玉ハサルヘシ然リ乍ラ汝ノ言モ捨テ難ケレハ以後ハ施捨ヲ慎ムヘシ決シテ憂フルヿ勿レ（以上巴氏ノ答辞ハ志氏ノ希臘史）又婚娶ノ事ハ些カ思フ子細アレハ猶ホ暫シノ猶予ヲ頼ミ入ルナリ

ト只管此ノ老執事ヲ慰メケル（前篇第三回）

この物語の第一回は、紀元前三九四年頃に時代を設定して、斉武の一老教師が阿善の危機を救った格徳王と士良武

という二人の賢王義士の事蹟を語って聞かせ、巴比陀（ペロピダス）と威波能（イパミノンダス）と瑪留（メルロー）という少年の三人三様の感奮の仕方を描いた章であるが、この三人がのちに斉武の民政と国権を回復する中心的な人物となる点で、これは全篇の序章と言うべきであろう。第二回はそれからおよそ一二年後の紀元前三八二年のギリシャ列国の形勢を説明し、そして第三回は同年の八月一二日、セーベの親斯波多派（プロスパルタン）の総統官、令温知（レオンチアダス）がスパルタの将軍法美（ホーピダス）の率いる軍勢をセーベ城内に手引きし、占領させてクーデターを起した経緯を描いたのであるが、右に引用したのは、クーデターを知る直前のペロピダスと老執事との会話によってかれの人となりを紹介した箇所である。

ペロピダスが貨殖の道には無頓着な、高潔な士であったことは、『プルダーク英雄伝』(Plutarch's Lives) に紹介されている。ただし前篇を書いた時点では龍渓はまだ『英雄伝』の英訳本を入手していなかったらしく、前篇の引用書目としてあげたのは次の八種類のギリシャ史であった。

一　具朗社 (George. Grote) 氏著希臘史／右千八百六十九年出版　十二冊
一　慈児礼 (John. Gillies) 氏著希臘史／右千八百二十年出版　八冊
一　志耳和児 (Connop. Thirlwall) 氏著希臘史／右千八百三十五年出版　八冊
一　格具 (George. W・Cox) 氏希臘及ヒ羅馬ノ古代／右原書日耳曼千八百七十六年出版　一冊
一　須密 (William. Smith) 氏希臘史／右千八百七十年出版　一冊
一　防是新 (Bojesen) 氏著希臘史／右千八百七十一年出版　一冊
一　遇杜律 (Goodrich) 氏著希臘史／右千八百七十七年出版　一冊
一　知杜礼 (Tytlers) 氏著万国史／右千八百六十六年出版　一冊

つまり先の引用における（　）内の須氏ノ希臘史は W. Smith “A History of Greece” を指し、志氏ノ希臘史は C. Thirlwall “A History of Greece” を指し、そして本文の左側に附したニやホの記号の箇所がこれらの著書から採った記述であることを示しているのである。

それ故右の引用からだけでも推測できると思うが、あの会話場面そのものは龍渓の創作であり、スミスのギリシャ史に老執事は出て来ない。ペロピダスの無頓着を諫めたのは友人たちであって、しかもクーデターの災禍を避けてアゼンに亡命中のことであった。老執事はペロピダス家の将来を案じて結婚をすすめたことになっているが、サールウォールのギリシャ史によればすでにかれは高貴な家の娘と結婚していたのである。このような全体的な虚構のなかに二人の記述がどのようにデフォルメされて採り入れられたか、念のため英文のほうも引用してみたい。

Pelopidas took the lead in the plans now formed for the liberation of his country, and was the heart and soul of the enterprise. Rebuked by his friends on account of his carelessness, he replied that money was certainly useful to such as were lame and blind. (W. Smith)

Pelopidas was of noble birth, inherited an ample fortune, and enlarged his connections by an honourable marriage. He was wholly possessed with an ardent desire of action and glory, concious of abilities equal to the loftiness of his aims, and valued the advantages of his rank and wealth only as they might be subservient to a generous ambition, in which his own elevation was not distinguished

from his country's greatness. (C. Thirlwall)

分かるように、ペロピダスの、金銭は身体に障害を持つ人たちにこそ必要なのだという意味の言葉は、スミスのギリシャ史のほうに見られるのであり、また内容的に対応する表現もこの言葉だけであった。サールウォールの説明によれば、ペロピダスは無私な大志の実現に役立たせうるかぎりでのみ、自家の門地と富に重きを置いたにすぎない。国家の興隆を別にして自身の昇進栄誉を望むようなことはなかったのだが、龍渓によってそれは「又斯ル事ニ施捨スルハ地下ノ祖先モヨモヤ不埒ナリトハ思ヒ玉ハサルヘシ」という言葉に変えられている。これは何段階かの解釈を経た意訳と言うべきであろう。

だが見方を変えれば、このようにその人格を象徴する逸話(アネークドーテ)のなかの科白(ことば)は、かならずしも強い場面的拘束力をその歴史家(または作者)に持たないのである。この逸話は『プルターク英雄伝』の「ペロピダス伝」に淵源を持っていたと思われるが、ここではまずかれの人柄を紹介するために、公共への奉仕に没頭して財産が損なわれるのを顧みなかったと説明され、友人との問答は、John Longhorne と William Longhorne とによる英訳本 "Plutarch's Lives" (1869) によれば、

And when his friends admonished him, that *money which he neglected was a very necessary thing; It is necessary indeed*, said he, *for Nicodemus there*, pointing to a man that was lame and blind.

となっていた。スミスはそれをアゼン亡命中の会話とし、G. Grote "A History of Geece" の場合は、ペロピダス

の果敢な戦死を述べたところで、「かれはセーベ沈滞の時期に同国人を勇気づけた第一の人物であり、愛国者としての叡知と友人としての無私寛容を以てイパミノンダスが自己に卓越した地位に就くべく尽力を惜しまなかった」と、言わば碑文的な讃辞のなかに吸収している。較べてみれば龍渓のほうがかえって原話に近い描き方をしていたと言えるだろう。つまりこういう人格上の核概念をどんな時点で明かすかはプロットの問題なのであって、龍渓はそれを報恩物語の伏線としていた。ペロピダスはセーベからの亡命の途中でスパルタ兵の矢に射られ、橋上からパルネス川の激流に落ちてしまうのだが、気絶して流されてゆくところを老漁夫の網にかかって救われる。この老漁夫がペロピダスを見知っていたのは、かつて夫婦ともに病床に苦しみ、その上長男に先立たれていよいよ貧窮に迫まられた時、「如何ニシテカ知リ給ヒケン君ノ御家ヨリ若干ノ恵賜ヲ被リケレバ……今日マデ斯ク存命ヘテ」という経緯があったからであり、こののち老夫婦の次男安重がペロピダスの従者となり、一たんは老夫婦のもとに帰るのだが、セーベの獄中に囚われていたイパミノンダス救出の密計を遂行することになるのである。これがあの核概念の虚構的な展開であることは言うまでもなく、前回で取りあげた服部撫松の『春窓綺話』において原詩の核イメージを桃花源記的に肉づけしたやり方を、プロットの面にまで拡張していった物語と見ることが出来よう。

それに対して場面的拘束を免れえない科白というものがある。比留利の家の酒宴に招かれた、親スパルタ派の重鎮の一人阿留知のもとへ、ペロピダスたちの暗殺計画を探索した密書がとどき、さてはペロピダスたちの民政回復の宿望は水泡に帰してしまうのかという緊迫した場面となるのだが、すでに酩酊したアルチアスは「大切ノ書状ハ明日ノ事ナリ（“business to-morrow”）（阿留知ノ辞ハ倶氐ノ希臘史）」と言ってふところに収めてしまった。この科白はグロートのギリシャ史では“Serious matters for to-morrow”となっており、正しくは「遇氐ノ希臘史」（S. G. Go-

odrich "A Pictorial History of Greece") とすべきであったが、ともあれこの科白は永らくギリシャの諺(プロバーブ)となったということで、"Serious matters to-morrow" (W. Smith) とか、"Let business wait until to-morrow" (C. Thirlwall) とかというように微妙な違いを見せながら、いずれも同一の場面に使われていた。民政と国権を回復したペロピダスは、神武軍 (Sacred band) というセーベ最強の軍隊を率いて各地で武勲を立てたが、スパルタの大軍と遭遇した時、一人の兵士が「今日コソハ、我々敵ノ手中ニ陥レリ ("We are fallen into our enemy's hand" 弗氏)」と叫んだのに対して、即座に「敵コソ、我々ノ手中ニ墜チザルヤ ("and why not they into our's?" 弗氏)」と切り返して、部下の戦意を振い立たせた。これは後篇第八回のエピソードであるが、龍渓は後篇に着手する以前には『プルターク英雄伝』の英訳本を入手しており、弗氏とは Plutarch (龍渓の訓みはプリューターチ) の略記であった。この有名な科白もまた同一の場面とともに各種のギリシャ史に採られている。野戦を得意とするスパルタ軍がはじめて、しかもより劣勢なペロピダス軍と正面衝突して敗れたという点で、スパルタの権威失墜とセーベの興隆とを象徴する科白だからである。

このように一口に逸話と言っても場面的拘束から相対的に自由なものもあれば、場面そのものと切り離せない場合もある。後者はおのずから事件の時間的な継起に従って配列せざるをえないのだが、前者は任意の時点を選ぶことができ、その意味での可変項と言うことができるのである。『英雄伝』のペロピダスの科白における 'lame and blind' はニコデマスという特定の人物を指した形容だったにもかかわらず、一九世紀のギリシャ史家はニコデマスを捨象し身体障害者一般に変えてしまい、龍渓はさらに「癈疾孤寡ノ如キ自ラ衣食スル能ハサル者」にまで拡張して、挿話配列の位置を変えていったのであった。

いま歴史叙述の方法を事件配列のレベルでとらえるならば、龍渓の参照したギリシャ史家たちは大むね時間的な前後関係に従っていた。前後関係を変えるのは焦点が二つ以上あった場合であって、例えばセーベの国権回復後の軍備の拡充とスパルタ軍との会戦を記述した後に、焦点をスパルタに移してペロピダスたちからセーベ城を追放された占領軍の指揮官が帰国後どのように処罰されたかに言及し、スパルタがさらに大軍をセーベに向けて発進させた経緯を語るというやり方だった。G・ジュネット[註五]のいわゆる〈単記法〉がその基本だったと言えよう。場面的拘束の強い挿話もこの基本に従わざるをえず、相対的に自由な挿話といえども一たんその配列のなかに置かれてしまえば、外見上は〈単記法〉内の一挿話でしかありえないのである。だがジュネットのように一つのテクストを固定的にとらえた上で、物語内容たる事件の時間的順序と、物語言説のレベルにおける順序の入れ替えのパターンを〈先説法〉や〈後説法〉に分類するのではなく、以上のごとく先行テクストの配列法の変更という面からとらえ直してみるならば、この可変項たる、相対的に自由な挿話こそが物語性の主要なファクターであることが分かるだろう。貨殖に無頓着で身体の不自由な貧しい人に施し物をするのが常だったという〈括復法〉的なくり返しの習慣が、まさにその時友人から非難されるという一回性の出来事に圧縮要約されて性格の強調に機能するとともに、〈単起法〉的な事件継起に特別な時間の厚みを与えるのだが、それだけではない。この可変項を零[ゼロ]にしたり、あるいは幾つかのヴァリエーションを作って何回か〈単記法〉の事件配列のなかに挿入したりする場合を想定してみれば分かるように、その挿入の位置とヴァリエーションの回数によって叙述法[ナラティヴ]の性質が全く変わってしまうのである。龍渓の参照したギリシャ史は、ペロピダスの家政無頓着とともに、かれとイパミノンダスの友情に言及することが多く、『英雄伝』はその理由を、かつて二人がスパルタのアゲシポリス王の指揮するマンティニアの戦闘に加わった時、重傷を負ったペロピダスをイパミノ

ンダスが身を挺して救ったからだと説明した。グロートは二人が神武軍の指揮官となった経緯にふれた記述に註を附して、しかし紀元前四〇四年のアゼン占領以後、セーベ軍がスパルタ軍と協力した戦争の事実はないではないか、とその説明に疑問を提している。それも重要な問題だが、私がこの友情もまた可変項の一つだとみる理由はそれと次元が異る。ペロピダスから親スパルタ派暗殺の計画に誘われたイパミノンダスは、暗殺という手段はその目的にふさわしくなく、無関係な市民を巻き込んで流血を強いる怖れがあるという理由で参加をことわってしまうのだが、一たんペロピダスが決行するや、言わば私兵軍を組織して協力に走せ参じた。友情の記述をこの時点に持ってくることも可能だったという意味で、それを可変項的な挿話とみるのである。もしこの可変項を零にしてしまったならば、のちにヒーリー王アレクサンドルに囚われたペロピダスの救出に向ったイパミノンダスの行為は全くちがった意味を帯びることになるであろう。

ところで龍渓は後篇の凡例で先行テクストの踏まえ方に二つのパターンがあったことを明かしていた。一つは「正史ヲ以テ大綱ト為シ其ノ細目ヲ補述スル」場合であり、二つには「細目ヲ正史ニ取リ其ノ大綱ヲ補述スル」場合であって、先ほどの老執事とペロピダスの会話は第二の例だと言えよう。第一の例はしかしここでは引用を省略する。歴史上の事件をクロニクルに従って記述し、「奸党政府ヲ覆セシ全節ハ具氏慈氏ノ希臘史」（前篇第四回）とことわっているようなところがそれに当り、特に検討すべき点はないからである。

ただそれとは別に指摘しておきたいのは、龍渓ははじめから民主制を主張する反スパルタ派を正党、寡頭政治を標榜する親スパルタ派を奸党を決めてしまったことである。このアプリオリな規定は、ホービダスの率いるスパルタ軍がなぜセーベ城外に野営することになったのかをほとんど説明していないことと相俟って、「奸党」のクーデターが

あたかも事前の策謀によるものであったかのごとき印象を与える。近世読本的な勧善懲悪の構図があらかじめあてはめられていたのである。それならばこれはかれが参照したギリシャ史に全く根拠がなかったのかと言えば、かならずしもそうではない。

That the Lacedæmonians should at the same time condemn Phœbidas and retain the Kadmeia—has been noted as a gross contradiction. Nevertheless we ought no to forget, that had they evacuated the Kadmeia, the party of Leontiadês at Thebes, which had compromised itself for Sparta as well as for its own aggrandisement, would have been irretrievably sacrificed. The like excuse, if excuse it be, cannot be urged in respect to their treatment of Ismenias; whom they put upon his trial at Thebes, before a court consisting of three Lacedæmonian commissioners, and one from each allied city. …… But there is something peculiarly revolting in the prostitution of judicial solemnity and Pan-Hellenic pretence, which the Lacedæmonians here committed. They could have no possible right to try Ismenias as a criminal at all, …….

これはグロートが反スパルタ派の重鎮イスメニアスの裁判にふれた箇所であるが、スパルタ政府がセーベ城を占領したホービダスを処罰したにもかかわらず、そのまま軍隊をセーベに居据わらせてしまった矛盾をまず指摘する。その上で、たとえスパルタ軍がセーベを明け渡したとしてもそれを手引きした親スパルタ派のレオンチアデスの行為は許しがたいとし、さらにイスメニアスの裁判がスパルタとその同盟都市の法官たちの前で行なわれたことを非難したのである。これはもちろん他国の司法権を犯す行為だからで、スパルタにセーベの総統官を裁く権限はない。それ自

体は正当な道義観からの非難と言えるが、しかしスパルタの犯した司法の尊厳の堕落と、汎ギリシャ的な立場による裁判という見せかけには何か特別に不快感を催させるものがある、という激しい口調は、更にある過剰な情動を感じさせる。あたかもセーベという現世で演じられた、天上的な善と陰府の悪との葛藤を見ぬいたかのごとき口ぶりである。そればかりでなく、レオンチアデス一味は二度と甦りえぬようにカデミーの神に生贄として捧げられねばならぬ、と言わんばかりの非難は、のちにペロピダスたちがレオンチアデス一味を暗殺する凶行を正当化する機能を果していたのであった。

この研究の第一回で言及した修辞学者A・D・ペップバーンの言葉が示すように、一九世紀半ばの歴史家に期待されていたのは不正に対する怒りと、善や高貴さへの共感という「健全な」道徳的感情であり、それはかならずしも偏見のない認識ということとは矛盾しなかった。[註六] そういう感情を欠いた、いわゆる「客観的」な叙述は科学(サイエンス)のものでこそあれ、けっして歴史というナラティヴのものではなかったのである。右のグロートの表現はそれ以上に過剰なものを感じさせるが、当時としてはむしろ歴史記述の必要条件に従ったまでのことと考えられていたはずで、龍渓にとっても受け容れやすかったのであろう。そういう善悪葛藤の図式が見えればこそ勧善懲悪的な構図を使った政治小説へと作り変えることができたのである。

龍渓にとって「正史」とはそういう道義的評価を含むものであったらしい。見方を変えれば、その道義的評価を正党奸党の対立図式に変えることもまた纂訳のなかの「翻訳」的な解釈の一つだったということになるわけだが、纂訳という点ではさらにもう少し微妙な問題を孕んでいる箇所がある。龍渓自身は特にその典拠を明示していないにせよ、古代ギリシャの建築や風俗、女性の地位などの紹介は当然文献を参照してのことであろう。ただここで言う微妙

な箇所とは龍渓が作った虚構の人物、その意味では補述に属する登場人物の場合であっても、ある程度そのモデルが推定できる人間についての表現である。その代表例と言えるのは、後篇に登場する平邪（ヘージアス）という人物であった。

かれはアゼンの南部サラミー島の貧しい家に生れ、学才を以て小学校の教師となったが、性格は勁烈剛毅、弁論に長じ、しかし「若シ其レヲシテ民福ヲ増スニ意アラシメハ誠ニ一廉ノ人物ナルベキニ、惜ヒカナ此人ハ人民ノ患害ヲ除クノ心ヨリ寧ロ一身ノ功名ヲ謀ルノ志熾ニシテ、又政治上ノ仕組ミヲ発明スルニハ特ニ鋭敏ノ才アレヒ其ノ目的トスル所ハ現在社会ニ存スルノ患害ヲ除クニアラスシテ唯自家ノ胸中ニ美麗ナル社会ノ雛形ヲ想造シ、其ノ一時ニ行ハレ難キニモ拘ラス此ノ美麗ナル雛形ノ如ク現在ノ社会ヲ改造更革セント欲スルニ在リキ」。こういう観念主義のためにアゼンを追放されるのだが、のちスパルタの亜世刺王（アゼシラウス）の後援を得て祖国にもどり、「乱ヲ好ム細民」の耳に入りやすい極端な平民主義を唱えて「乱党」を組織し、ついにアゼンの独裁者となってしまうのである。

この物語の時代にヘージアスのような人物がアゼンに活躍したという歴史記述はみられないが、それより三十年ほど前、アルキビアデスなるしたたかな政治家が出現した。アゼンの民主派と寡頭制派との葛藤に乗じて亡命先から帰り覇権を握った経歴は、ヘージアスのそれと共通する。かれは名門富裕の家に生れ、才能に恵まれてソクラテスに愛されたが、門閥と家産を自己一身の虚栄にしか用いようとせず、ソクラテスもその驕慢はためられなかった。サールウォールはこんなふうにかれの性格と、結局はかれが影響を受けることになったソフィストたち――ソクラテスの対立者とサールウォールはとらえていた――の思想を以下のように描いている。

The love of pleasure was always strong in him, but never predominant; even in his earlier years it

seems to have been subordinate to the desire of notoriety and applause, which gradually ripened into a more manly ambition. But his vanity was coupled with an overweening pride, which displayed itself in a contemptuous disregard for the rights and feelings of others; and often broke through all restraints both of justice and prudence.

They offered their instructions to all who, possessing a sufficient capacity, regarded the pursuit of fame, wealth, and power as the great business of life; and undertook to furnish them with the means of acquiring that ascendancy over the minds of men, which is readily yielded to superior wisdom and virtue, by the simple force of words. As according to their view there was no real difference between truth and falsehood, right and wrong, the proper learning of a statesman consisted in the arts of argument and persuasion by which he might sway the opinions of others on every subject at his pleasure; and these were the arts which they practised and taught.

せっかく衆に抜出た才能に恵まれていたにもかかわらず、おのれの虚栄と野心のためには他人の権利や感情を無視してしまう傲慢さと、弁舌一つで民心を動かしうるという自負の点で、イーソクラテスとアルキビアデスは同一のタイプであった。これまでの研究では、龍渓が、自己の観念的な雛型を社会に押しつけようとする人間の危険を描いたことを、フランス大革命のイメージを借りて同時代の自由党左派の逸脱を警告しようとしたもの、と見られてきた。たしかに一理も二理もある見方ではあるが、イーソクラテスのような煽動家の問題はやはりギリシャ史から学んできたとみる

のが妥当だろう。ただヘージアスとアルキビアデスとの生い立ちはおよそ対蹠的であって、後者はむしろペロピダスと共通するが、門地と家産に対する心がまえの点ではこの両者が対照的だったことも龍渓は念頭に置いていたと思われる。ペロピダスの盟友イパミノンダスはピタゴラス派の哲学者リシスに学んだが、龍渓は獄中のソクラテスになぞらえていた。名門に生れた人間の徳をペロピダスに与え、ソクラテスの哲理をイパミノンダスに託し、アルキビアデスをその二人とは対照的なヘージアスに変えていったと判断できるのである。

ただしアルキビアデスは当時の極端民主主義的な熱狂によって若くして将軍となり、スパルタと戦って敗れ、のちにその敵国に亡命するのだが、煽動家としての風貌はさほどあざやかではない。その亡命期間の一時期、アゼンではアンチホンという人物が、寡頭制派の策謀と定見のない民衆を巧みに利用して権力を握った。――『経国美談』にも安知本（アンチホン）なる人物が登場するが、これは別人物でもちろん役割も異なる――ヘージアスはかつて「共議政ヲ主張シ代議政ヲ非難シ（中略）旧来ノ五百名会ヲ廃シ全ク人民各自ノ共議政ト更メ」ようとしたが、政争に敗れて亡命したのちはやや慎重となり、帰国後は「臨会スル村邑ノ総人民ニハ必ズ国庫ヨリ公費ヲ以テ日当ヲ与フベキ」ことや、「政論場ニ多数ヲ占ルノ意望ハ則チ之ヲ法律ト見做スモ可ナリ」というラジカルな直接民主主義を主張して民衆の心をつかんだ。グロートは亡命先から帰国したときのアルキビアデスの姿と、アンチホンの権力操作をこんなふうに描いている。

Relieved, substantially though not in strict form, from the penalties of exile, Alkibiadês was thus launched in a new career. After having first played the game of Athens against Sparta, next that of

Sparta against Athens, thirdly that of Tissaphernês against both—he now professed to take up again the promotion of Athens interests. In reality, however, he was, and had always been, playing his own game, or obeying his own self-interest, ambition, or antipathy.

Antiphon, about to employ this anti-popular force in one systematic scheme and for the accomplishment of a predetermined purpose, keeps still within the same ostensible constitutional limits. He raises no open mutiny; he maintains inviolate the cardinal point of Athenian political morality—respect to the decision of the senate and political assembly, as well as to constitutional maxims. But he knows well that the value of these meetings, as political securities, depends upon entire freedom of speech; and that if that freedom be suppressed, the assembly itself becomes a nullity—or rather an instrument of positive imposture and mischief. Accordingly he causes all the popular orators to be successively assassinated, so that no man dares to open his mouth on that side; while on the other hand, the anti-popular speakers are all loud and confident, cheering one another on, and seeming to represent all the feeling of the persons present. By thus silencing each individual leader, and intimidating every opponent from standing forward as spokesman, he extorts the formal sanction of the assembly and the senate to measures which the large majority of the citizens detest. That majority however are bound by their own constitutional forms. …… Antiphon thus finds means to employ the constitutional sentiment of Athens as a means of killing the constitution; the mere empty form, after its vital and protective efficacy has been abstracted, remains simply as a cheat to paralyse individual patriotism.

私利私欲と野心のために国と国とを戦わせながら、一度追放されるや、反感と怨恨を抱いて帰ってきた男、一方ではテロリズムの恐怖政治を布きながら、他方では有名無実化した元老院や議会を利用して多数意見による裁可という合法的手続きを装って、党派的利益をのみ拡充しようとする危険な「平民主義者」、そういうネガティヴな視点から龍渓はヘージアスの像を組み立てていったのである。この男がペロピダスの恋人令南（レヲナ）を殺してしまう。いや正しくは、ヘージアスに煽動された「乱党」が、スパルタ軍接近の危機に直面し、セーベとの同盟を説く純正党の阿慈頓（アリストジートン）を殺害し、さらに血に飢えて純正党の李志（リシス）の屋敷を襲い、その娘のレヲナまでも犠牲にしてしまったのである。すでにふれたごとく歴史上のペロピダスには妻子がいたのだが、龍渓は独身に設定し、アゼン亡命中に身を寄せたリシスの家の娘と互いに想い合う関係に「補述」していった。そのレヲナをヘージアスの徒党に殺させるという形で、ペロピダスとヘージアスとの対照性を敵対関係にまで強めていったのだと見ることができる。この時代より一〇〇年ほど前、ヒッピアスとヒッパルカスという兄弟がアゼンを治めていたが、ヒッパルカスがハーモジュウスの妹を傷つけたため、かれと友人のアリストジートンはヒッパルカスを殺してしまった。残ったヒッピアスは悪しき専制君主（ダイラント）と化し、弟殺しの秘密を探るためレヲナという女性を拷問にかけるが、レヲナは舌を噛んで自害する。ここから龍渓はレヲナという名前を借りてきたのであろう。

こうしてみると纂訳と補述との境界はひどく曖昧だったことになるが、ヘージアスの場合こそ纂訳の纂訳たる所以をよく現わしていたと見ることも出来る。一種類のテクストをほぼ逐語訳的に別な国の言葉に移し替えることだけを翻訳とする固定観念を棄ててみれば、何種類かのテクストから切り取った章句（ピース）を適宜に混配して日本語に改めるやり

方としてとらえ直しうる龍渓の纂訳もまた翻訳の一つだったと言えよう。私たちの外国文化の受容の仕方としては、むしろこのほうがより一般的でさえある。そしてそれぞれの章句（ピース）の扱い方には直訳もあれば意訳もあり、文明開化を「バカモリコウニナル」とするような解釈も含まれて、けっして一様ではないのである。

ただし龍渓がこの混配を自分のテクスト内に明示できたのは、歴史的事件を言説内容とし、個々の出来事の前後関係が言わば客観的に決まっていたからにほかならない。当然のことながらここでは、ペロピダスたちの民政回復をスパルタ軍のセーベ占領以前に語ることはできても、前者の出来事が後者よりも先に起ったと時間的な順序までも変えてしまうことはできない。換言すれば〈先説法〉や〈後説法〉の前提として事実レベルでの順序を想定することであって、龍渓はこれを踏まえながら個々の出来事に関する章句（ピース）の混配を自在に行なっていたわけである。この見方からすればヘージアスの場合もその一ヴァリエーションだったことになる。ホービダスのスパルタ軍がレオンチアデスの手引きでセーベ城内に入った出来事を、かれは少くとも三種類以上のギリシャ史の章句（ピース）を編集して再構成したのだが、ヘージアスの場合は、アゼンの市民がスパルタの脅迫に屈し、ペロピダスたちを後援した二人の将軍を処刑した（ただし一人は処刑以前に逃亡）という「事実」を核として、それより半世紀近く前のアルキビアデスやアンチホンに関する章句（ピース）を配合したのである。これもまた纂訳に数えてさしつかえないであろう。

同時にそれはまたペロピダスの家政無頓着と同様、いやそれ以上にこの物語のなかの可変項的な機能を担っていた。アゼンの民主制の不安定な体質と煽動家（デマゴーグ）の出現は切り離せない現象だが、いつどこで誰れにそれを演じさせるか。かならずしもそれはセーベの民政回復直後、スパルタがアゼンに大軍を差し向けて反セーベ同盟への参加を強制した時点である必要はない。レオンチアデスたちは権力掌握後、ペロピダスたちを亡きものにしようと刺客をアゼン

に潜入させ、亡命派の重鎮の一人安度具(アンドロクリダス)を殺したが、それとオーバーラップさせてもよかったのである。あるいはヘージアスを仮構して一挙に「乱党」による無政府状況を爆発させるのでなく、ライトモチーフのように小事件をくり返し織り込んでゆくことも出来たであろう。その反対にそういう時代背景的な記述を一切行なわないこと(零項化)も可能であり、いずれにせよこの可変項をどう扱うかによって基本的な事項の関係と意味づけは微妙に変わってくるのである。

とするならば、次に検討しなければならないのはハイデン・ホワイト[註七]のいわゆるプロット化と言語的情報処理法則(リンギスティック・プロトコール)との問題であるが、これは次章の文体の問題とともに考えてみたい。

第二章　補述と文体

龍渓は歴史と小説とを、事実と虚構、真実と虚偽というように二項対立化させる発想を持たなかったように思われる。これは参照したギリシャ史の記述をまったく「事実」として疑わなかった態度と矛盾しなかった。どのギリシャ史もペロピダスが家政に無頓着だったと書いてある以上、それは「事実」でなければならなかった。そういう伝承のオリジナルを探し出し、オリジナル自体が含んでいたかもしれない美化や誇張を疑いつつ「真相」を追及するという「科学」的な懐疑主義とは無縁だったのである。

しかしこれを素朴とか未熟とかと言うのは早計だろう。坪内逍遙は『小説神髄』で、「近きころ矢野文雄大人の纂訳せられし経国美談といへる書ハ智と徳性と情緒とを三俊傑に擬したるなりとある博識が評されたり此事はたして然

らんにハあまり面白きことゝハ思はず何となれバ彼の以パミノンダス辺ロピダスの輩ハ現に正史中の人間にて仮設の人物にあらざれバなり」と批判した。多分この「博識の評」は後にふれる藤田鳴鶴の尾評を指し、もしそうならば道遙はほとんど故意に矮小化したことになるのだが、それはともあれいま注意したいのは、道遙が正史中の人物の描き方に小説とは違う基準を設けようとした点である。虚構の人物にすら道徳の鋳型をはめることに反対した道遙のことを、これは当然の判断と言えるが、こと歴史に実在した人物に関しては、先天法（または演繹法、予め用意した性格概念で作中人物の言動を作り出す方法）で描いてゆくことさえも批判したのである。ところが龍渓にとってそういう区別は考慮の外であった。敢為のペロピダスと智謀に長けたイパミノンダスはたしかにかれの参照したギリシャ史においてセーベ回復と対スパルタ戦との主役であったが、これに血気の木強漢メルローを配する。このメルローはペピダスの暗殺決行に参加したMellonという人物をモデルにしたと思われるが、Mellonは名前が出て来る程度でその性格を読み取れるほどくわしくは記述されていない。[註八] 龍渓のメルローはその名前だけを借りた虚構の人物と言うべきだろう。馬琴の『八犬伝』は『水滸伝』の百八人から百人を差し引いて人物類型をより明確にしたキャラクターシステムだったが、龍渓はさらに果断、思慮、単純という三類型にまで煮つめつつMellonの役割を大きくしてゆき、にもかかわらずそれによって正史の事実性が損なわれてしまうとは考えていなかった。これは歴史の言説と小説のナラティヴの類縁性を認めていた証拠であり、しかもそれを縫い目なしの形に隠蔽するのでなく、一方では典拠を明示し、他方ではキャラクターシステムを露呈させながら縫合の手口をも読み取らせようとしていたのであった。

その点でかれがきわめて意識的な方法家だったことは、次のように、自分が依拠している物語のパラダイムを対象化できていたことからも分かる。アゼンに亡命中のペロピダスとメルローはリンスの家に身を寄せていたが、娘のレ

ヲナは当時の風習に従って「喪祭ノ如キ大礼ノ時ニ非サレハ女子ハ男子ト共ニ交ルヿナク平常ハ唯家内ノ婦人房ニ屏居シ極メテ親交ノ人ニ非ラサレハ男子ト談話スル事稀ナリ」（リノ一節ハ格氏ノ希臘史）。だがその年も暮れて、次の春がめぐってきた。

両人ハ空シク歳月ノ過クルヲ憾ム中ニモ次第ニ此家ノ男女ト親好ヲ生シ今ハ主人ト両人カ晩餐ノ席ヘ此家ノ女子令南ヲモ共ニ列セシムルヿアリ又時トシテハ其父ノ命ニ従ツテ令南ハ両人ノ為メニ音曲ヲ奏スルヿモアリケリ今傍ラヨリ之ヲ見レハ巴比陀ハ優美ナル俊秀ノ名士ナリ令南ハ容姿端正ナル絶世ノ佳人ナレハ恰モ是レ一対ノ伉儷、得難キ匹偶ニテ相思ノ情縁ハ定メテ両人ノ間ニ生スヘキカ如ク思ハルレトモ巴比陀ハ其ノ一心唯本国回復ノ一事ニ在テ未タ他事ヲ思フニ暇アラス又令南ハ懐春ノ年紀ナルモ家訓甚タ厳正ナルカ故ニ毫モ想恋ノ情ナシ今若シ二人ノ有様ヲ評スレハ自動ノ活機ヲ具ヘタル男女一対ノ偶像ニ異ナラス仮令ヒ其レヲシテ恰好ノ伉儷ナラシムルモ肝腎ナル相思ノ情ナキヲ如何セン（第七回、傍点は引用者）

「今傍ラヨリ之ヲ見レハ」以下は、近世の読本や人情本を念頭に置いた表現とみてさしつかえない。というのは、これほど絵にかいたような才子と佳人の出合いがあった以上、近世の物語においてはかならず互に一目惚れ、親の眼を盗んで密会を重ねたり、あるいは想いを深く胸中に秘めて晴れて結ばれる日のために身を慎んだり、いずれにせよ直ちに相思相愛の仲に陥るべき場面だからである。その意味で「今傍ラヨリ之ヲ見」るとは、そういう近世的な恋物語に典型的な場面として対象化してみれば、という批評的視点の提示であった。ことさら近世的物語の常套的な場面

を作っておきながら、しかしペロピダスは祖国回復にのみ心を奪われ、レヲナは家の訓えが厳しくて異性への関心を抱くことなぞ思いもよらず、「肝腎ナル相思ノ情ナキヲ如何セン」と、いわば読者の「期待の地平」をはぐらかしてみせたのである。

だからと言って、しかし龍渓は「期待の地平」たる恋物語の約束を全く否定してしまうつもりはなかった。レヲナは父親がペロピダスの人格識見をしきりに賞賛するのを聞くにつけても「崇敬ノ心ハ遂ニ漸々ト愛慕ノ情ニ」変わってゆく。ペロピダスはレヲナの機転で刺客の難を危うくまぬがれたお礼を言おうとして、「熟〻ト令南ノ容貌風采ヲ見ルニ春花秋月モ其妍麗ヲ羞ツヘキ絶世ノ佳人ニシテ今マテハ然程ニモ思ハザリシ其人ノ何故ニ斯ク今日ニ限リ我ガ心腸ヲ断タシムルヤ必竟ハ其人ノ厚意ヲ感スルノ余リ斯クハ愛着ノ心ヲ生シタルカト此ニ初メテ愛慕ノ情ヲソ発シケル」と、ようやく一人の好ましい異性としてレヲナを意識するようになったのである。このような恋情の意識化の時間の導入が、近世的な一目惚れのパターンに対する批判だったことは言うまでもないが、いずれにせよ相愛の仲にまで進ませたことでは「期待の地平」を裏切っていなかった。厚意への感謝が愛情に変わる心理的なプロセス自体は、今日からみてとくに目新しいところはない。夏目漱石以降はもう少し凝った意匠を纏い、何らかの抑圧が働いて自分の意識に隠されていた恋情が、離別や思いがけぬ再会などのクリティカルな瞬間にはっきりと自覚される展開となり、それ以来二人はこの「真実な」感情に忠実たらんとして世俗の常識と葛藤をかもして生きてゆくことになる。戦後文学に至って、その恋情の根源が時には近親相姦的な願望の転移されたものとして、一そう深刻に「深層」心理化されてきたわけだが、見方を変えれば、要するに精神的傷痕（トラウマ）と自己同一性（アイデンティティ）の回復という近代的な主体性（サブジェクト・イデオロギー）神話を蔽うための恋愛パラダイムが出来上ったにすぎない。戦後の文学研究、とりわけ評伝的研究はそういうパラダイムに深く冒

されており、その眼でみれば龍渓が作った「意識化の時間」による恋愛心理のプロットはあまりにも素朴で表層的でしかなかったことになるだろう。だがいま注意しておきたいのは、先のような仕方で近世以来の類型に安住している同時代の実録小説や政治小説の恋愛パラダイムと自分の流儀とを差異化したこと、しかもその「意識化の時間」の導入によって出来事の配列レベルで前提とされる「客観的」な時間を相対化しえた点である。

以上は龍渓の補述における方法的自覚の一例であるが、才子佳人のストーリーを追う文体のほうはかならずしも読本や人情本を異化する方向でなく、むしろそれらに近づけていった。刺客事件で身に危険の迫ったのを知ったペロピダスとメルローは、リシスの別荘に隠れ住むことにする。

乃チ主人ハ此夜送別ノ宴ヲ設ケ其席ニハ愛女令南ヲモ侍セシメテ四人互ニ歓ビヲ尽シケリ令南ハ昨夜ノ注意ニ因テ今日シモ親シク巴氏ト相語ルヲ喜フノ間モナク今又其ノ為メニ其人ト遠ク相別ルヽノ悲ミヲ嘆チケル彼ノ刺客ノ為メニ二人カ相思フテ相離ルヽノ有様ハ恰モ是レ黒風浪ヲ翻シテ文鱗ヲ打散シ、赤燄林ニ騰テ采翮ヲ驚分ス（第九回）

これは読本的な和文脈と漢文書き下し文との混合と言うべきで、前者はレヲナの心情に即し、後者は語り手がこの場合全体を対象的に評した表現、という使い分けが見られる。前者の傾向は次のごとく、ペロピダスがいよいよセーベに出立する送別の場面においてさらに顕著であった。

家女令南ハ去年ノ秋ニ尽キヌ名残リヲ惜ミモ敢ヘス一タヒ別レヲ告ケシヨリ思ヒハ転タ真澄鏡、晴レヌ案シニ打過クル月日モ已ニ一年余リ三里ノ路ハ遠カラヌモ家ノ訓ヘノ厳正ケレバ相見ル由ノナキノミカ空行ク雁ノ便リサヘ絶エテ久シキ其人ニ今相逢フノ喜ヒハ世ニ譬フヘキ物ナキモ其喜ヒニ引換ヘテ又モ別レノ酒宴トハ情縁薄キ我カ身カナト平生ノ端正ナル風姿、悧懇ナル言語動作モ何トナク唯茫然ト見エニケル又巴比陀モ今此人ニ相逢フニ及テハ断腸ノ思ヒアルナルヘシ故ニ巴比陀ト令南ト二人カ暗ニ別ヲ惜ムノ情ハ彼ノ主人李志カ名士ノ遠ク別ルヽヲ惜ミ又瑪留カ其恩人ニ別レヲ惜ムノ情趣トハ甚タ異ナル所アラン斯クテ主客歓ヲ尽スノ後、両人ハ暇ヲ告ケテ遂ニ此家ヲ立出ケリ（第十六回）

レヲナの心中表現たる「一タヒ別レヲ告ケシヨリ」から「情縁薄キ我身カナ」までは全くの七五調であり、この箇所の片かなを平がなに改めてみれば読本の一節として十分に通用する。「思ヒハ転タ真澄鏡」というような掛詞はもちろん漢文書き下し文にはありえず、第九回で「家訓モ甚タ厳正ナルカ故ニ」と音読みされていた表現が、ここでは「家ノ訓ヘノ厳正ケレバ」と訓読みのふりがなを附して和文化されている。前回の視点からとらえるならば、語り手の漢文書き下し文がレヲナの心中において和文に「翻訳」されていたわけである。それならばこの場合和文脈との同一化だけをねらっていたのかと言えば、かならずしもそうではない。「平生ノ端正ナル……唯茫然ト見エニケル」と語り手の視点にもどってからは、ペロピダスとレヲナの「二人カ暗ニ別ヲ惜ムノ情」という共軛的な感情と、リンスやメルローのそのような感情的葛藤のない惜別の情との落差に眼を向けている。このように各人物が暗黙のうちに迫

る感情的位相の違いを同一場面で描き別ける発想は読本や人情にはみられない。龍渓はこの落差を指摘することで、旧来の心情表現を意図的に模倣、再現しつつそれとの差異化をはかっていたと言えるのである。

このように表現の面でも各種文体の章句（ピース）を混合していたわけだが、前篇を書き終えた時点でのかれの自覚は以下のごとくだった。

今ヤ我邦ノ文体ニ一定ノ体裁ナキカ故ニ著者ハ此書ヲ草スルニ当テ随意自由ニ諸種ノ文体ヲ用（ママ）キタリ然レモ戯レニ従来ノ小説体ノ語気ヲ学ヒシ処多ケレハ読者之ヲ察セヨ例ヘハ「斯ル田舎ノ片山里ニ」トアルヲ「斯ル、デンシヤ、ノ、ヘンサンリ、ニ」ト読マレテハ迷惑ナリ「斯ル、キナカ、ノ、カタヤマザト、ニ」ト読ムヘシ又「独リ此家ヲ立去リケリ」トアルヲ「独リ、コノイヘ、ヲ立去リケリ」ト読ムヘカラス「独リコノヤ、ヲ立去リケリ」ト読ムヘシ総テ大和詞様ニ読メハ間違ヒナク句調ヨシ此書ノ文体ハ誰氏ノ文体ニモアラス著者体ノ文章ト評セラルヽモ可ナリ（前篇「凡例」）

この「著者体ノ文章」の生成については別稿[註九]で検討したのでここでは省略するが、一つ注意しておくと、「斯ル田舎ノ片山里ニ」が「斯ルデンシヤノヘンサンリ、ニ」と読まれる心配などは、現代の眼からは無用な懸念に思われるかもしれない。ところが当時は、近世後期以来の儒学生が漢文を暗記する学習法の便法として漢字を全て音読みする「棒読み」の習慣が残っていた。それが外見上は漢文書き下し文の『経国美談』の読み方にまで適用されてしまうことをかれは懸念したのであろう。大和詞ふうな訓読みの強調はそういう学習伝統からの異化の試みでもあったのであ

る。

だがそれはとにかく、その「斯ル田舎ノ片山里」なる表現を用いた箇所でかれは長歌までも試みている。ペロピダスは一人旅に病んで、祖国回復の前途にも悲観的になってしまっていた。

昨日ニ比ラヘテ今日ハ又最ト、苦痛ヲ増シタルハ我身モ天ヨリ棄テラレタルカト独リ臥床ニ嘆チツ、窓ヨリ外面ヲ眺ムレハ月ノ光リハ朦ケニ見エテハ隠レ、隠レテハ又現ハル、有様ハ有為転変ノ世ノ中ニ能クモ相似タル景色カナト尚ホモ悲歎ヲ増シケル折シモ遙カノ彼処ニ琴ノ音シテ歌ノ声サヘ聞ユレハ巴氏ハ耳ヲ欹テツ、斯ル田舎ノ片山里ニ優シキ調ベヲ聞クモノカナ如何ナル人ノ手スサミニテ斯ル妙音ヲ奏スルヤト憂キカ中ニモ病苦ヲ慰メ暫時彼ノ音ヲ打聞ク中ニ琴声次第ニ近ツキシカ此家ノ窓下ニ立止リ又一曲ヲ奏シツ、

歌見渡セハ　野ノ末　山ノ端マデモ　花ナキ里ソナカリケル　今ヲ盛リニ咲キ揃フ　色香愛タキ其花モ　過キ越シ方ヲ尋ヌレハ　憂キコトノミゾ多カリキ　霜降ル朝ニハ葉ヲ隕シ　雪降ル夜ニハ枝ヲ折リ　枯レシトマデニ眺メラレ　集リ会フ憂キコトノ　積リ積リシ其中ヲ　耐ヘ忍ヒシ甲斐アリテ　長閑キ春ニ巡リ逢ヒ　斯ク咲キ出ルソ愛タケレ　世ノ為ニトテ誓ヒテシ　其ノ身ノ上ニ喜ノ　花ノ莟ハ憂キ事ト　知リナハ何カ憾ムヘキ　春ノ花コソ例ナレ　春ノ花コソ愛タケレ（第十一回）

じつはこれはかつてペロピダスが作った『春ノ花』という「短歌」で、以前はなればなれになった従者礼温が歌っていたのであった。龍渓がなぜ「短歌」と呼んだのかは分からないが、明治一六年にこういう長歌形式から新体詩へ

移る過渡的な歌が実験されていた点でも、これは注目すべき表現であろう。ことさら「大和詞様ノ句調」の一例として「斯ル田舎ノ」の箇所を挙げたのは、この歌にも読者の注意を促したい意図があったためと思われる。歌の出来栄えはともあれ、撫松纂述の『春窓綺話』が歌謡を漢詩化したのと対照的な形式を選んだこと自体に龍渓のモチーフがあったはずであり、厳冬の苦節と早春の開花とを対比させた寓意性は末広鉄腸の『雪中梅』に受け継がれてゆくのである。

龍渓はヨーロッパにおける吟遊詩人の知識と、日本の旅芸人の門附けのイメージを摺合してこの場面を作ったのであろう。この歌が長歌と新体詩との折衷的な形式となったのは、おそらくそのためであった。場面としては馬琴『八犬伝』の第五輯、犬山道節の乳母音音が一人行く末を案じていると馬子の小室節が聞えてくるところと似ていなくもない。もともと戸外で吟誦する習慣の乏しい日本では、小室信介の『自由艶舌女文章』のごとく、都々逸のような座敷唄の伝播が民権運動を組織化してゆくイメージしか生めなかったのであるが、この場合は吟遊詩人の歌が人と人とのめぐり合いを作った点で新しく、しかもレオンの口を通してペロピダスの歌がかれ自身に帰ってくるというプロットとなっていた。この再帰のプロットは、自身の感情を自己了解する「意識化の時間」と同じタイプの話法として機能していたのである。

このように龍渓は漢文書き下し文を出来るかぎり和文化しようとし、その過程で時には一種の「翻訳」さえ試みていたのだが、それとは別方向の文体実験もなかったわけではない。後篇に着手する前、かれはセノホンとプリュータ[7]ーチを入手していた。多分そのことと関係すると思うが、後篇「自序」で改めてくわしく文体の問題を論じ、同時代の共時的な文体状況を漢文体、和文体、欧文直訳体、俗語俚言体に別けて考察した。その全部の紹介は省略するが、

これまで取りあげることのなかった欧文直訳体について、かれはその特徴を「其ノ語気時トシテ梗渋ナルガ為ニ或ハ文勢ヲ損スルヿナキニアラス然レ氏極精極微ノ状況ヲ写シ至大至細ノ形容ヲ示スニ於テハ他ノ三体ノ有セサル一種ノ妙味ヲ含蓄セリ（中略）又社会年ヲ累ヌルニ従ヒ人事益々繁密ニ赴クカ故ニ往代旧時ノ文体ヲ以テ現世ノ新事物ヲ叙記センヿハ甚タ覚束ナキ者ナリ故ニ欧米ノ進歩セル繁密ノ世事ヲ叙記シテ毫モ遺脱ナカラシムル欧米ノ語法文体ヲ移シ来テ之ヲ我カ時文ニ用ルハ非常ノ便宜ヲ感スルコト尠ナカラス」と論じた。事いよいよ繁ければ言もまたいよいよ繁し、という言語増加の現象に着目して表現刷新を唱えたのは荻生徂徠であるが、かれはそれと「欧米ノ進歩」とを短絡させて、「欧米ノ語法文体」を模した欧文直訳体の優位を主張したのである。その意味で和文化の試みがポピュラリティ獲得の条件だったのに対して、欧文直訳体はよりヨーロッパ的知識を持つ読書階級向けの文体だったと言える。ただし『経国美談』は近代の「人事益々繁密ニ赴」いた世態風俗を描いたわけでないから、この時かれが主に意識していたのは「極精極微ノ状況ヲ写シ至大至細ノ形容ヲ示ス」という面での有効性のほうであっただろう。この「形容」は対象の比喩修飾ではなく、姿かたちの意味であることは言うまでもない。前篇で参照したギリシャ史が出来事間の脈絡を重視してただ珠数のようにつないでゆくだけだったのに較べて、セノホンやプリューターチは状況の具体的な再現に力を入れていた。欧文直訳体の評価はそういうテクストの入手と無関係ではなかったと考えられる。

その点の検討に都合がよいのはレウクトラの戦いの場面であるが、引用が長大になる怖れがあり、ここではテジラ(*)の戦いのほうを取りあげることにする。スパルタ軍がセーベの同盟国タナグラに侵攻したのを聞き、ペロピダスは神武軍を中核とするセーベ軍を率いて出撃した。John Langhorne と、William Langhorne とが英訳した。“Pultarch's Lives”(1869) は、両軍の遭遇戦をこんなふうに描いていた。

He kept a strict eye upon the city of Orchomenus, which had adopted the Spartan interest, and received two companies of foot for its defence, and watched for an opportunity to make himself master of it. Being informed that the garrison were gone upon an expedition into Locris, he hoped to take the town with ease, now it was destitute of soldiers, and therefore hastened thither with the *sacred band*, and a small party of horse. But finding, when he was near the town, that other troops were coming from Sparta to supply the place of those that were marched out, he led his forces back again by Tegyræ, along the sides of the mountains, which was the only way he could pass: for all the flat country was overflowed by the river Melas, which, from its very source, spreading itself into marshes, and navigable pieces of water, made the lower roads impracticable.

.....

The Thebans then retreating from Orchomenus towards Tegyræ, the Lacedæmonians who were returning from Locris met them on the road. As soon as they were perceived to be passing the straits, one ran and told Pelopidas, *We are fallen into the enemy's hands. And, why not they*, said he, *into ours*? At the same time he ordered the cavarly to advance from the rear to the front, that they might be ready for attack: and the infantry, who were but three hundred, he drew up in a close body; hoping that wherever they charged, they would break through the enemy, though superior in numbers.

The Spartans had two battalions. Ephoras says, their battalion consisted of five hundred men, but Callisthenes makes it seven hundred, and Polybius and others, nine hundred. Their *Polemarchs*, Gorgoleon and Theopompus, pushed boldly on against the Thebans. The shock began in the quarter where the

generals fought in person on both sides, and was very violent and furious. The Spartan commanders, who attacked Pelopidas, were among the first that were slain; and all that were near them being either killed or put to flight, the whole army was so terrified, that they opened a lane for the Thebans, through which they might have passed safely, and continued their route if they had pleased. But Pelopidas disdaining to make his escape so, charged those who yet stood their ground, and made such havoc among them, that they fled in great confusion. The pursuit was not continued very far, for the Thebans were afraid of the Orchomenians who were near the place of battle, and of the forces just arrived from Lacedæmon. They were satisfied with beating them in fair combat, and making their retreat through a dispersed and defeated army.

『経国美談』ではセーベ軍が進軍中に道に迷い、霧が晴れてみるとスパルタ軍に前後挟まれているのに気がついたことになっているが、これによれば増援のスパルタ軍との接触を避けて退却中のところ思いがけず相手と遭遇してしまったのである。退却中であればこそ、ただ前方に敵を認めただけで驚愕し、思わず一人の兵士が「我々は敵の手中に陥た」と叫ばずにいられなかったのであろう。ペロピダスはとっさに言葉を切り返して士気を奮い立たせ、果敢な戦闘で敵の指揮官二人を斃したところ、スパルタ軍はさっと路を明ける。これは退路を開いて相手の鋭気を逸らすためだが、もしセーベ軍がそれに応じて退却をはじめれば当然士気は弛むはずで、スパルタ軍はそれに乗じて追尾戦に移ることもできる。ペロピダスはそれを見抜いて兵を返しさらに手をゆるめず攻撃を続けたのである。

プリユーターチ(ら)の特徴はこういう戦闘の機微(あや)が具体的に読み取れるような記述をしていたことであって、前篇で参

照したギリシャ史にはそれがなく、最もくわしいグロートのものは記述量自体はプリユーターチとほぼ同量なのだが、ただ遭遇の経緯と戦闘結果がのっぺらぼうに述べられているだけであった。後篇に至ってにわかに列国の政治的駆け引きと戦争の記述が増えたのは、そういう機微を豊かに含んだ記録を手に入れることができたからであろう。しかも龍渓はさらにそれに触発されたかのごとき具体的なイメージを附加していた。

抑モ此ノ渓野ハ帝慈（テジヲ）ト名ル地ニシテ斯将呉後礼（コルゴレオン）ハ已ニ昨日多那呉（タナグヲン）ヲ陥レ別将番蘇陀（バンソイダス）ヲシテ雅、斉ノ援兵ニ備ル為メ此ノ帝慈ノ野ニ陣セシメタルナリ神武軍ハ殆ント敵兵ノ中央ニ陥リシ有様ナレバ霎時樹林ノ傍ニ駐屯セシ中早クモ敵ノ斥候其ノ前後ニ徘徊セシカ忽チ夫レト悟リシニヤ前面ナル斯軍ノ一団ハ三百ノ神武軍ニ向ヒ徐々トシテ進行ノ運動ヲ始メタリ、此ノ地ハ左右ニ山脉連リ騎馬ノ通行自在ナラネハ神武軍ノ一団カ山ヲ超テ遁ル、ニハ其ノ馬ヲ捨テサルヘカス退テ走ランカ徒歩スレハ敵兵ニ追ヒ及ハレン進ンテ戦ハンカ敵兵ノ捕虜トナラン進退茲ニ谷リシ失望ノ余リニヤ巴氏ノ傍ニ在リシ一兵士ハ思ハス

今日コソハ我々敵ノ手中ニ陥レリ（"We are fallen into our enemy's hand" 弗氏）ト嘆セシニ巴氏ハ之ヲ顧テ声ヲ励ケマシ

敵コノ我々ノ手中ニ墜チサルヤ（"and why not they into our's?" 弗氏）

ト云ヒ終テ整列ノ令ヲ下タシ馬ノ頭ヲ立直シテ三百ノ孤軍ヲ円陣ニ形チツクリ直ニ進軍ヲ令シタリ此方ヲ指シテ押寄スル敵軍ニ向テ前進シ其距離百余歩ニ迫リシ攻撃ノ一令ト与ニ神武軍三百余騎馬ヲ踊ラセ劔ヲ揮ヒ恰モ疾電ノ如ク殺奔セリ兼テ精撰セシ勇鋭ノ壮士ト肥健ノ良馬トヲ以テ組立タル一団ナレハ今其ノ疾駆シテ敵兵ヲ突クニ当テ

ハ鉄蹄地ニ着カス人馬与ニ空ニ躍ルカ如ク見ヘタリシ斯軍ハ敵兵ヲ寡兵ト侮リシニヤ整然タル戦隊ヲモ結ハス不規律ニ前進セシカ今ヤ三百ノ神武軍ハ其ノ中央ヲ目掛ケテ勢ヒ猛ク衝突シ遂ニ之ヲ押シ破リシハ恰モ堅嵓カ波浪ノ間ヲ進ムカ如ク見ヘタリシ（第八回）

先に引用した英文に対応する表現はさらに続くのだが、ここに引いただけからも分かるように、これもまたけっして逐語訳的な翻訳ではなかった。対応するところを見ても、ペロピダスは騎兵を前衛とし、それに後続する歩兵部隊に密集隊形（close body）を取らせたのだが、龍渓は騎兵に円形陣を組ませている。両軍の激突はスパルタの二将がみずから陣頭指揮に当った部署で始まったのだが、龍渓の騎馬隊は戦列整わぬ敵軍の中央突破を敢行したのである。それに加えてスパルタ軍の斥候の動きや、両軍が間合いを詰めてゆく運動を補述して場面の具体性をより高めようとしている。ここでは引用を省略するが、前篇においてペロピダスがスパルタ兵の矢に射られた場面や、かれとレオンチアデスとの闘争の表現はほとんど読本の口調そのままであった。それに較べて右の箇所は掛詞や七五詞などの「句調」を抑制し、事に即して叙述する散文化の傾向を進めていたのである。

もともと読本の作者にとって戦闘とは歌舞伎の立ちまわりを大がかりにしたものとイメージされていたらしく、またそれがポピュラリティを獲得する必須の条件と考えられていたのであろう、その表現は立ちまわりのテンポを言語化したものという気味合いがないでもなかった。それとは別様な戦闘表現を試みる時かれは『平家物語』や『太平記』を参考にし、あるいはそれらを『日本外史』ふうに翻訳した漢文的な修辞とも言うべき「恰モ疾電ノ如ク」「鉄蹄地ニ着カス人馬与ニ空ニ躍ルカ如ク」「恰モ堅嵓カ波浪ノ間ヲ進ムカ如ク」などの比喩を用いたのであった。これらは

「極精極微ノ状況ヲ写ス」面ではやや難点があるが、かれとしては「文勢ヲ損スル」ことのないための配慮だったのかもしれない。

ただしかれはそれらの形容にわずらわしいほど「如ク見ヘタリシ」といった動詞表現を加え――そのため文章作法としては稚拙な印象さえ与えかねなかったのだが――対象自体の運動とその見え方とを区別していた。これは第一章で取り上げたようなペロピダスとレヲナの同席の様子を「今傍ラヨリ之ヲ見レバ」と対象化した批評意識とおなじとは言えないが、見る意識を顕在化させた点では変りない。換言すればかれは即対象的な欧文直訳体と戦記物語的な修辞、あるいは事態の極精(デテル)、極微(ルス)と概括的な形容(フィギュラティヴ)との狭間(はざま)に立ち、狭間それ自体を意識化していたのである。

ちなみにこの見え方の意識をもう少し拡げて、対象の模写的(ミメティック)な表現とその解釈(インタプリテイション)との区別としてとらえてみるならば、かれは前篇の初めからしばしばそれを意識した書き方をしてきた。例えばペロピダスの屋敷と室内の家具調度を叙述して「此家ノ主人カ猶ホ年若クシテ其ノ心ヲ外事ニ専ニシ未タ一家ノ細事ニ深ク其ノ意ヲ留メサルヲ知ルニ足レリ」と解釈し、その体軀の特徴を紹介して「文武ノ教育ニ飽クマテ其身ヲ慣ラセシハ……之ヲ知ルニ足レリ」と判断する。レオンチアデスとスパルタ軍のクーデターを知ったペロピダスたちは弓矢を執って走ったが、メルローだけは楯と槍を執って弓矢は持たなかった。「蓋シ同人ハ力飽マテ強ケレトモ性来不器用ニテ弓矢ニ長セサレハナリ」。横暴な村長たちを打ちこらしめて意気揚々としていたのは「蓋シ今奸党ヲ除クノ大功ヲ立テント欲スルニ当リ……手始メ良シト思フナルヘシ」。時にはこういうコメント自体が滑稽な効果を生んでしまうこともあった。レヲナの侍女はメルローの毀鐘(われがね)のような大声に驚いて逃げ出したが、「定メテ此ノ女ノ鼓膜ニハ多少ノ損処ヲ生セシナルヘシ」。

いまこれらの場面から右のようなコメントを除いてみるならば、いわゆる客観的な叙述のみが残る。つまり主人の

人となりの解釈は読者の読みにまかせて、ただ室内の家具調度のみを描く、言わば述べて語らずの表現となるのである。その後の近代小説はこの方向へ進み、対象の「客観的」な描写に価値を置いて、見え方やコメントを言説面から消去し、抑圧していった。その点でもかれの書き方は過渡的だったと言えるのだが、むしろこの場合は、「客観的」な描写とはローマン・ヤーコブソン[註十]が言う意味での換喩的なレトリック効果にほかならず、読者の解釈の方向づけを背後に秘めているわけだが、その機密を顕在化させた表現だったとみるべきであろう。

ここで再びテジラの戦いにもどるならば、セーベ軍の勝利はセーベに喜びと自信、スパルタに屈辱を与えた。そのいずれにも偏しない立場から「歴史的意義」を論ずるならば、野戦を得意としたスパルタ軍をより少数のセーベ軍が密集戦法を用いて敗ったことで、スパルタの脅威がうすれ、列国の力関係に重要な影響を与えたことになる。一九世紀の歴史家は言うまでもなく第三の視点に立っていたが、龍渓はセーベの側に立ってその「壮武ナル名誉」を称揚し、プリューターチは軍事的観点から、「このセーベ軍の勝利は全ギリシャ人に若者が卑劣を恥じ、正義の確信をもって決断し、危険よりも恥辱を怖れる時いかに勇敢な戦闘を行ないうるかを教えた」と評価していた。こういう評価の違いは当然戦闘の記述に影響を及ぼす。歴史的意義を説く歴史家にとって戦闘の機微は言及に値しなかった。プリューターチはペロピダスの巧妙な指揮とセーベ軍の果敢さに焦点を合わせたわけだが、龍渓はそのテクストを自分の評価から読み替えた形で、スパルタ軍の不用意な油断を「敵ヲ寡兵ト侮リシニヤ整然タル戦隊モ結ハス不規律ニ前進セシカ」と補っている。こういう附加を認識とみるか、想像と呼ぶかは微妙なところであろう。

かれは他の参照文献を踏まえた箇所では、本文の左側に細かくニとかホとかの符号をつけて、例えば「(ニノ一節

ハ須氏ノ希臘史)」と典拠を示していた。ところが先に引用した部分を含むテジラ戦の記述についてはその段落の終りに「(以上二節弗氏)」と註記するのみであった。そのかぎりではスパルタ軍の不規律に関する言及はプリューターチの記録に基づく「正史」の一部分であった。少くともかれの意識では老執事やレヲナなどを登場させた想像の部分とは区別された、「正史」中の事実についての言及だったらしいのである。

記録にない事柄には禁欲的であらねばならない現代の歴史学の立場から言えば明らかにこれは龍渓の勇み足であるが、かれの文体論に即してみれば「極精極微ノ状況ヲ写ス」歐文直訳体の必然的な帰結だったと思われる。いまその箇所からかれの附加したところを取り除けてみれば、

今其ノ疾駆シテ敵兵ヲ突クニ当テハ鉄蹄地ニ着カス人馬与ニ空ニ躍ルカ如ク(見ヘタリン)、其ノ中央ヲ目掛ケテ勢ヒ猛ク衝突シ遂ニ之ヲ押シ破リシハ恰モ堅嵓カ波浪ノ間ヲ進ムカ如(ク見ヘタリ)シ

となる。ついでに( )で括った「見ヘタリ(シ)」という特徴的な言葉を抜いてみれば、そのまま軍記物語の一部分としても通用するだろう。つまりこのような伝統的な和漢混淆文を、より具体的な「事実」に即した歐文直訳体へ質的に転換させる方法として、省略してみたような表現が附加されていたとも言えるわけで、その根拠をかれはプリューターチのテクストに置いていていたのである。

その点で認識か想像かの問題は、文体的要請とからめてとらえる必要がある。読本的な和文体への要請がレヲナの場合のごとく想像的補述(虚構)を招来したのに対して、歐文直訳体の要請が先行テクストの記述に欠けていた「事

実」の認識を捉したのだと言えよう。この文体的要請と内容との関係はもちろん逆もまた真でありうる。

ハイデン・ホワイト[註十一]によれば歴史記述は先行テクストの読み替えによって行なわれる。新資料の導入とは、別な論理と方法とで出来事をプロット化した歴史記述から、新たな視点でデータを採り入れることにほかならない。かれはその読み替えの過程に生ずる認識や想像の作用を否定しなかった。というより、むしろその作用を不可避的な事態と見て、それが出来事のプロット化を支配する仕方を構造言語学の方法を借りて類型化し、改めて歴史記述の「客観性」の問題を問うたのである。

かれは一九世紀の歴史記述のプロット類型としてロマンス、喜劇（コメディ）、悲劇（トラジディ）、諷刺（サタイア）の四つを挙げている。歴史家がこの点についていつも自覚的だったとはかぎらない。一方でそれは世界観にかかわるが、他方ではある出来事を自分の歴史学の領域における「事実」として前自覚的に措定してしまう、その半ば無意識的な知覚のメカニズムにかかわっているからである。この「事実」知覚のメカニズムのなかで作用するシステムを、かれは言語学的様態（リンギスティック・モード）または言語的情報処理法則（プロトコール）と呼び、隠喩（メタファー）、換喩（メトニミイ）、提喩（シネクドク）、イロニイという四つの修辞学的な概念で説明している。龍渓の挙げた漢文体、和文体、欧文直訳体、俗語俚言体の機能と、かれの使い方とをそういうシステムになぞらえてみることが出来るだろう。

ただし実際にその言語的情報処理システムがどのように作動して「事実」を選択し、歴史的事実として措定してしまうのか、かれはかならずしも説得力ある形で具体的に例証しているわけではない。かれはローマン・ヤーコブソンやレヴィ・ストロースが隠喩と換喩とによって人間の意識や社会制度の下部構造的な言語的システムを明かそうとした、その如何にも構造主義者くさい二項対立観を批判して、一八世紀の修辞論を再評価しつつ提喩とイロニイの作用

をも加えようとした。だが結局それは、プロットの四類型の前提として想定された仮説以上のものではなかったと言うべきであろう。換言すればこのプロット四類型と修辞学的四項図式との照応関係は、ホワイト自身が言うところの提喩的なマクロコスム—ミクロコスム関係の理論的要請によって作られた仮説であり、マクロコスムたるプロット四類型の選択がしばしば前自覚的であるという理由で、さらにその下部構造的な無意識の根拠としてミクロの言語的情報処理システムを挿入したのである。もう一つ見方を変えればかれは何が起ったかをとらえる「事実」調査のレベルと、なぜ起ったか、どんなふうに展開し何如なる結果をもたらしたかを説明する話法（ナラティヴ）のレベルとを区別したにもかかわらず、両者を貫ぬく法則を言語学的モデルに求めて、それを「事実」調査に先立つ意識下のメカニガムとして押しつけてしまった。もしそれを理論的に安定させたいならば、出来事それ自体の関係のなかにそのシステムの作用を見出すほかはない。だがそれは認識のシステムを「客観的」世界の反映とみる実証主義に後もどりすることでしかなく、あくまでも言語的システムと「客観的」現実世界とを非還元的関係としてとらえる構造言語学にとって、そしてまた歴史記述という言説レベルの独自な位相やそのイデオロギー的機能を明かそうとするホワイトにとっても、それはとうてい容認しがたいことであった。ばかりでなく、もし「客観的」現実の反映とするならば、隠喩や換喩や提喩に対するメタ比喩的関係にあるイロニイの作用も現実に見出されねばならないわけだが、それもまたとうてい認めがたいこととなってしまう。結局これは言語外の出来事たる「歴史的事件」を前提とせざるをえない歴史記述に関して、あえて構造言語学の方法を採ろうとする場合に不可避的なジレンマなのであって、ホワイト自身も自覚していたと思うが、そのジレンマの根源たる非還元的な関係を弁証法的緊張関係と受け取めて知的エネルギーに変えてゆくほかはないのである。

北大文学部紀要

だがそれはそれとして、ホワイトのプロット化に関する問題意識は、龍渓が挙げた四つの文体の機能に新しい照明を当ててくれる。いわゆる漢文体は事件の劇化と、そのうねりのなかで各自の価値観によりおのれ一個の志を貫ぬく人間を描き別けて、ホワイトが言う状況内文脈論的（コンテクスチアリスティック）な相対主義を取りつつも悲劇的（トラジック）なプロットを作り出す。読本体は善悪二元論の構図のなかで因果律の運命法則にあやつられながら遂にそれを克服して自己同一性（アイデンティティ）を回復する、奇伝（ロマンス）的なプロットを促す。歐文直訳体は事件を事物のレベルで巨細に描いて現実感を与え、換喩的な部分（パート）―部分（パート）関係でとらえた人と人、事件と事件との間に働く外在的な力学的法則（メカニズム）を瞥見させつつサティリカルな展開に向ってゆく。俗語俚言体は以上の三つのなかに挿入されてイロニカルな機能を発揮し、それが支配的な場合は現世肯定の祝祭的な結末の喜劇（コミック）的なプロットとなるわけである。

ただし龍渓はそのいずれか一つの文体に固執することをしなかった。共時的なそれらの文体から歐文直訳体のみを選び、あるいは当時世論と化しつつあった言文一致体を選んで最も新しい文体と意味づけ、それ以外のものを通時化して過去に押しやるような啓蒙主義的な発想を拒んでいたのである。それについてのかれ自身の理由は既に紹介したが、別な箇所で「余カ是書ノ前篇ヲ起稿スルヤ四体ヲ兼用スルニ決意シ其中ニテ専ラ俗語俚言体ノ一種ナル日本旧来ノ稗史体ヲ用ヰンコトヲ勉メタリ」（後篇自序）とことわっているところを見れば、かならずしも稗史体の読本と俗語俚言体の人情本や洒落本との区別を明確に意識していなかったようにも思われる。たしかに読本的な文体を用いつつ人情本的な場面に近づけたり、滑稽本や洒落本の口調を混えたりした箇所もみられるのだが、しかしそのなかでペロピダスとレヲナの出合いのごとく人情本的な場面を読本的な文体で批評的に対象化し、漢文体的な表現をレヲナの心情表現のなかでは読本体に「翻訳」するなど、相互の相対化を自覚的に行なっていた。しかも場面的には才子と佳

人とが最終的には結ばれて周囲の葛藤も目出たくおさまる俗語俚言体の人情本的なプロットを予想させるものでありながら、言わばそれと相対化し合った文体の干渉を受けて漢文体的な悲劇的な結果となり、さらにそれが読本体の伝奇的なプロットに繰り込まれてゆくのであり、私が龍渓の「四体兼用」に注目するのもそういうからみ合いがセットされていたからにほかならない。ハイデン・ホワイトにとってこのような兼用のあり方は、歴史叙述の問題だけでなく、ナラティヴ一般の問題としてももちろん予想外のことであったであろう。

テジラの戦闘場面において龍渓はセーベ軍の隊形を描くとともに、スパルタ軍の態勢をも言わば文体的に認識してしまったわけだが、これはプリューターチの叙述の部分（パート）―部分（パート）関係への転換、組み替えだったと言える。その上で戦闘の帰趨をとらえるならば、セーベにおける神武軍という目的意識の強烈な防衛軍の編成とその訓練の高さ、スパルタ軍の常勝意識に傲った集中力の欠如という背景が浮び上る。さらにはセーベ市民の国権回復による高揚感に対する、スパルタにおける国内矛盾（セーベを占領したホービダスの処罰とスパルタ軍の居据りに象徴されるような、世論とアゼシラウス王との乖離）という政治的背景が見えてくる。じじつ龍渓は先に引用した戦闘場面ではなかったが、そういう背景に何箇所かで言及していた。このような背景は、両軍の遭遇から戦闘、勝敗に至る一連の出来事の時間的な経過とおなじ流れのなかにあり、言わばその大過去に位置するように思われる。その点からみれば両軍ともにその背景を背負って戦い、勝敗の決定因もそこに求められねばならないだろう。だが記述レベルからみるならば、その背景の時間と戦闘の時間とは同一の流れの延長線上にあるというより、むしろ垂直に交わっているのであり、戦闘の経過と結果をその起点とし、記述者の認識に従って中過去の背景から大過去の背景へとたぐり寄せられてゆく。その意味で歴史的背景の時間とは記述者の認識運動が作り出し、しかもより近い時点の背景のほうが先に言及されていく

点で逆流する時間とさえ言えるであろう。少くともそれは戦闘とともに顕現してその帰趨を規定する、共時的な、歴史的条件としての時間なのである。さらに背景をたぐり寄せてマルクス主義で言う下部構造、つまり生産力と生産諸関係にまで及んでみれば、そのことがよく分かる。神武軍の選抜方式や部隊編成、イパミノンダスがレウクトラの戦いで用いた画期的な密集隊形式や戦闘方法などは、そこから説明できないわけではない。以上のようなことを踏まえて、多分ハイデン・ホワイトは力学的因果論（メカニスティック・セオリー）（関係のなかに働く外在的な作用因（エフィジェント）の法則をとらえようとする還元主義）を、換喩という言語的情報処理システムとのアナロジーで見ていたのであった。

そうしてみると龍渓は欧文直訳体という換喩的な文体に促されてスパルタ軍の戦闘形態にまで言及し、だが素早く一転して「恰モ堅嵓カ波浪ノ間ヲ進ムカ如ク」と軍記物語的な直喩の修辞に切り替え、隠喩的にして有機体論（オーガニック・セオリー）的な歴史話法（ナラティヴ）のほうに近づいていったわけである。有機体論とはマクロコスム―ミクロコスムという提喩的なパラダイムを含み、最終的な歴史のゴールを目指す全体化の運動が進んでゆく、という歴史観を指す。それを隠喩と結びつけるのは矛盾のようだが、「堅嵓カ波浪ノ間ヲ進ム」というセーベ軍進撃の隠喩は、波浪が厳に打ち当り逆巻いて流れるという表現の主体と客体との転倒、つまり意図的な誤用（ミスユース）であり、これを媒介として「堅嵓」が戦闘全体を主導するセーベ軍の隠喩にして提喩に転化されていたと見ることができる。そういう「堅嵓」に、寡頭専制に打ち克つ民主制の理念が託されていたのである。

このような転換を、性急に読本体による欧文直訳体の批判的対象化と呼ぶことは避けねばならない。だが、纂訳と補述とのかかわりを単純に事実と想像との関係として平板化してしまえない、文体レベルでのからみ合いの一例とすることはできよう。『経国美談』の発端と結末という大枠は決まっていたとしても、そのなかではこのような文体の

転換によってプロットの方向性は絶えずゆれ動き、増幅していたのである。ただしその実情をみるには、もう一つ馬琴が言う小説七則の側からも検討してみる必要がある。

第三章　内包された読者からの仕掛け

ところで『経国美談』のもう一つの特徴は、各回の末尾に読者の批評を載せたことである。前篇は栗本鋤雲と成嶋柳北と藤田鳴鶴の三人であったが、柳北が不幸にして亡くなったため、後篇では依田学海に代った。いずれも当時の著名なジャーナリストであり、これだけ尾評の書き手を揃いえたことは『経国美談』の権威を高める上で大いに役立ったことであろう。近世の読本ではしばしば各輯の末尾に「看官よろしく推したまへ」などという読み巧者への呼びかけがみられたが、この四人はその読み巧者を具体化したものと言える。その尾評は当然多くの読者に影響を与えたはずだが、それではかれらの読み方はどのようなものであったか。

これまで述べたことと関係する箇所を例とするならば、前篇の第三回、ペロピダスが老執事から家政無頓着の苦言を聞かされているところへ、メルローたちが駆け込んできてクーデターの急変を告げ、アゼンに亡命する途中スパルタ兵の矢に射たれて急流に転落してしまったわけだが、その尾評は次の如くであった。

鋤雲云。流離顚沛中。加以二失偶一。天何待二志士一亡情。

柳北云。悲惨之状。写得逼レ真。

北大文学部紀要

鳴鶴云。先写二家屋庭園之趣一。使四人知三其為二名門右族一。次写二主人風采一。而後及二賓客一。叙事秩然。而猶求レ備則当レ叙二家中器具之布置一。写下去当時縉紳所二使用一物上則覚二殊妙一。

又云。借二家宰之言一。述二巴氏素行一。又示下其無中匹偶上。照二応第五回(漁夫救死一節)第八回一。(註十二)(令南愛慕一節)

又云。巴、威二人対話間。有下窘窮生三百計一之父母一句上。此為二後節禍機暴発之過脉一。

又云。巻中第一英雄。忽仆二於敵箭一。使下人激中発憐二正士一憤二姦徒一之情上。然不レ記三飛箭中二巴氏一。而単写二馬騰陥レ水之状一。可レ見天下不三漫生二英雄一亦不三漫殺二英雄一。筆力縦横。

この回にかぎらず柳北の尾評がとおり一ぺんだったのは、すでに体調がすぐれなかったためかもしれない。それに対して鳴鶴の評はきわめて詳細であり、まず龍渓が家屋や調度を詳述した意図を指摘し、次には老執事の言葉が、第五回で老漁夫にペロピダスが救われ、第七回でレヲナと才子佳人の出合いをする伏線だったことを明かしたのである。次にイパミノンダスの「窘窮ハ百計ヲ産ムノ父母ナレハ」云々が後に続発する「禍機暴発」のライトモチーフを示している、と指摘した。これは意味づけ過剰であるとしても、さらに続けてペロピダスが矢に射たれた場面を――「主ハ誰レトモ白羽ノ一箭、巴比陀ニ向ツテ飛フヨト見エシカ、一声高ク嘶キツヽ、乗タル馬モロトモ、橋ノ下ナル逆巻ク水ヘ、真倒マニ落入テ、死生モ知レスナリニケリ」と――馬に焦点を移した描き方をしたのは、作者に深い用意があったからにほかならないと分析している。ペロピダスは無傷だったおかげで気絶したまま流れているところを老漁夫に救われて蘇生できた、ということの伏線として鳴鶴はこの描写をとらえたのである。「嗚呼経倫ノ大才ヲ懐テ智勇一世ヲ蓋フノ英雄モ唯一条ノ流矢ノ為メニ底ノ水屑(ミクヅ)ト消失セシハ憐レ敢果(ハカ)ナキ有様ナリ」という一節をみれば、そ

の分析もやや意味づけ過剰とせざるをえないのだが、ただ少くとも馬に焦点を移した一種の間接描写に注意を向けていたことで、かれの分析の緻密さが分かるであろう。

だがそれ以上にここで注目したいのは、かれが老執事の言葉などの伏線的機能を「照応」と呼んでいた点である。これは老執事の言う「慈善」が老漁夫の救助を引き出したというだけでなく、一方の老人の「他人ニ施捨スル事ノ多キヨリ」云々という苦言と、他方の老人の「君ノ御家ヨリトテ若干ノ恵賜ヲ被リケレハ」という感謝が対比されていたことをも意味する。またペロピダスが未だ配偶者を得ないのを歎いた老執事の「何卒早ク御婚娶アリテ」という願望と、第七回の「肝腎ナル相思ノ情ナキヲ如何セン」という期待はずれとが対比されていたのである。このような小説作法について、馬琴が『八犬伝』の第九輯中帙附言で次のように説明していた。

所云伏線は、後に必出すべき趣向あるを、数回以前に、些墨打をして置く事なり。又襯染は下染にて、此間にいふしこみの事なり。この後の大関目の、妙趣向を出さんとて、数回前より、その事の、起本来歴をしこみ措なり。（中略）又照応は、照対ともいふ。譬ば律詩に対句ある如く、彼と此と相照らして、趣向に対を取るをいふ。かゝれば照対は、重複に似たれども、必是同じからず。重複は、作者謬て、前の趣向に似たる事を、後に至て復出すをいふ。又照対は、故意前の趣向に対を取て彼と此とを照らすなり。

この見方からすれば老執事の言葉は伏線であるとともに数回後の場面と照対することになるわけだが、鳴鶴は後者に重点を置いてそのプロット的機能に注目したのである。鳴鶴がこのようなとらえ方を直接に馬琴から学んだか否か

はにわかに判断はできない。[註十三] ただ後篇の第九回、イパミノンダスの家に貞納（テイノ）と裕綺（ゴウキス）という二人の若い娘が身を寄せるのだが、次のような尾評をみてもかれと馬琴が共通する小説作法論をもっていたことは明らかであろう。

鳴鶴云。巴、威二人。作者意中常欲二遙々相対一。故其叙事亦常彷彿相準。前篇為二巴氏一立レ伝。後篇為二威氏一立レ伝。故前篇第三回。写三巴氏家園与二其風采一。後篇此回。却写三威氏家園与二其風采一。前日才子寓二於佳人家一。今日佳人寓二於才子家一。前篇有下巴氏唱二義於雅典一謀二恢復一大議論上。後篇有下威氏争二礼於斯波多一抗二斯王一大議論上。皆是相準而対立。読者不レ可レ不レ知。

又云。此回所レ叙。有レ情有レ景。而蔵二許多脚色一在二其中一。写二出一少年一則為下他日狙二撃斯王一伏線上。写二出二佳人一則為下後年配二名士一伏線上。写二出米世（メッセナ）一則為下威氏立功伏線上。可レ見作者不二漫下レ筆。

つまりもともとペロピダスとイパミノンダスとをすぐれて照対的な人物として描き分けようとしたのであるから、その方針に従って、前篇ではペロピダスの屋敷と人となりを紹介したのに対して後篇ではイパミノンダスのそれを描き、また前篇でペロピダスがレヲナの家に身を寄せたのに対してここではイパミノンダスの家に二人の佳人が寄寓することになったのだ、とかれは見たのである。もし後篇においてもイパノミンダスが佳人の家に身を寄せたとすれば、これは同一趣向の重複として避けなければならない。こういう判断が上の照応の分析に含まれていたとみてさしつかえないだろう。前篇でペロピダスがアゼン（前篇では阿善、後篇では雅典と表記された）においてセーベ奪還の雄弁をふるったが、後篇では全ギリシャの和平会議においてイパミノンダスがスパルタの亜（ア）（阿）是刺（ゼシラウス）王の横暴に一

人敢然と抗言した。これは後篇第十四回のことなのであるが、これも馬琴ふうに言えば「その物は同じけれども、その事は同じからず」という点で照応の原則にかなっているのである。総じて鳴鶴はそういう小説作法論に準拠して分析を行なっていたのであった。

このような小説作法論はヨーロッパの小説観とはきわめて異質であり、馬琴が『八犬伝』を書いた一九世紀前半の時点においてはそもそもこれだけ整備された小説構成の方法はまだヨーロッパでは出現していなかったと思われる。馬琴が言う伏線や襯染は後に出来する大きな出来事の墨打ちまたは仕込みという点で、時間的な前後関係を含意するから、これは主にストーリィにかかわる概念と言うべきだろう。それに対して照応と反対とは――馬琴は両者の違いを「その物は同じけれども、その事は同じからず」と、「その人は同じけれも、その事は同じからず」と説明した――ストーリィともプロットとも次元の異なる、むしろ共時的概念であった。犬塚信乃が自分を捕縛にきた犬飼現八と芳流閣上で闘うことと、かれが犬山道節とともに現八を捕えようと千住河の舟中で争うのとは、屋上と舟底、逮捕する者と抗う者との関係が「反対」になるわけだが、これは時間を捨象してはじめて見えてくる照応なり反対なりの構造である。換言すれば作者のなかでは一方を構想した時に他方も同時に構想されていなければならぬ共時的な場面であり、ただそれぞれをストーリイラインのどの箇所に配置するかによって一見時間的な前後関係が生じ、プロット化されるだけなのである。

しかしはたして龍渓がそういう作法に従っていたどうかはこれは、別な問題であろう。それに龍渓が準拠した「正史」においていつも照応や反対に好都合な出来事が起ってくれるわけでない以上、ハイデン・ホワイトが言う歴史叙述のプロットの問題とこれとはおのずから区別されなければならない。その点の検討は後にゆずるとして、ともあれ鳴鶴は

右のような分析の尾評を加えていたのであり、さし当り注意しておきたいのは一般の読者とそういう尾評とのかかわりについてである。というのは、その尾評と接する度に読者は物語内容を辿る興味を中断させられ、共感と反撥とのいずれにせよ、尾評と対話しつつ自分の読み方の反省を強いられてしまうからにほかならない。

その点でこれは極めて独特なテクストなのであって、尾評のおかげでより深い読みが可能となる反面、鳴鶴のような小説構造観を暗黙のうちに受け容れさせられることにもなりかねないだろう。ばかりでなく、伏線的機能を示唆するコメントによって「期待の地平」が方向づけられるとともに、はじめての読者でさえ既に半ば再読者の位置に立たされてしまうのである。一とおり読み終えたのちに尾評の是非を確かめるという、他のテクストでは得られない興味はありうるのだが、自分なりに見出したコードを再調整しながら仕掛けと智恵くらべする「自由」あるいは「快楽」が狭められてしまう。あらかじめ与えられた尾評のコードとの対話や調整に関心が縛られてしまうからである。その意味でかれらの尾評は物語内容に対するコメントでありながら、じつは同時に物語内容の一部として機能している。物語内部の仕掛けならぬ、テクストのレベルにおける仕掛けなのであった。

このような読者との関係化による馬琴的な小説構造の教育的意図は、後篇で柳北に代った依田学海の尾評にも見られる。が、ここでは省略し、前篇の三人が物語の結びでどのような総括を行なっていたかを最後に検討しておきたい(後篇の総括はごく簡略なものでしかなかった)。次はスパルタと結托した奸党を追放し、民政を回復して大団円を迎えた結末の尾評である。

鋤雲云。日月再明後。又起二一団愁雲一。信乎。人生常在二憂患之中一。

又云。通篇文章。擒縱自在。頗得下孔明征二服南蛮王孟獲一之法上。所レ憾造語時有下生梗兵(失)二円熟一者上耳。

柳北云。読二此書一者。宜レ注二眼于作者精神潜匯之処一。否則至竟与二矮人観レ場一般。

鳴鶴云。写二出諸名士善レ後之策一。極精極密。然這回作者最用レ力処。唯在二巴氏辞レ撰譲レ職之語一。僅々数行文字。深寓二箴戒一。世人須二服膺一。

又云。全篇結構之精密。筆力之縦横。固不レ待レ論。若夫不レ枉二正史一。統貫以二実蹟一呈二這奇観一。実是傑作。是書不レ伍二尋常小説一者。則在レ此。是書妙味亦在レ此。然更知二作者苦心則却大一也。

又云。作者以二智力良心発情三者一。組二成是書一。巴氏則是智力。威氏是良心。瑪留是発情。仮二三人之挙動一。写二出三者相頼相制之状一。瑪留常服二従巴氏。是発情為二智力所レ制者。第五回。第十二回。瑪留与二巴氏一相離。則是発情独専二其力一者。故或困二於政論一。或被二縲絏一。又其人時有二奇言奇行一。是発情之時隠見者也。又第十一回。巴氏単身決レ死。是智力時晦惑者也。又第十五回。威氏送レ書諫二巴氏一。是良心制二智力一者也。其他三人之挙動。莫レ非レ表二三者一。是通篇之大主眼。読者玩二索之一。

龍渓が「欧文直訳体ハ其語気時トシテ梗渋ナルカ為ニ或ハ文勢ヲ損スルヿナキニアラス」(後篇自序)とことわったのは、鋤雲のこの批評があったためかもしれない。鋤雲は鳴鶴のごとく構成面にはほとんど注意を払わず、各回で登場人物の言動を『三国志』や『水滸伝』の人物になぞらえ、あるいは安積艮斎の石田三成評を引き合いに出したりして、好意的な印象批評を附していたのであるが、それだけに「造語ノ時ニ生梗、円熟ヲ兵(失)フ者アリ」という総評は龍渓の耳に痛かったのであろう。多分その文体評価の基準はいわゆる漢文体にあったと思われるが、たしかに

その点からみれば、英語の翻訳に強いられた耳なれぬ熟語が多く、漢文的な語調を失った表現も散見するのである。

ところが鳴鶴はその表現をむしろ「極精極密」と評価したのであって、龍渓の「然レモ極精極微ノ状況ヲ写シ」云々（後篇自序）は明らかにそれを反映している。後篇で欧文直訳体への志向をより強めていたのも、こういう評価に支えられたからであろう。その意味では龍渓自身もまたかれらの尾評につき動かされ、対話を重ねつつ文体への問題意識を深めていったのである。先に検討したテジラ戦の表現がそういう両面からの要請に応えるモチーフを持っていたとすれば、その文体もまたかれだけのではなかったということになる。

ただし鳴鶴の総評はむしろペロピダスとイパミノンダスとメルローの三人の関係のほうに向けられていた。龍渓が正史を枉げずに（この理解には問題があるが）事実を語ってなお尋常の小説を超えた伝奇たりえた、その理由を三人の描き方に求めたのであろう。第二章で言及しておいた逍遙の批判はこの総評を念頭に置き、鳴鶴がペロピダスの智力、イパミノンダスの良心、メルローの発情と整理したのを、智と徳性と情緒と言い換えたものと思われるが、かれはそのような理念を以て正史中の人物を律することに疑問を提したのである。だが鳴鶴からみれば、それこそが尋常の小説を超える伝奇たりえた必須の条件にほかならなかった。その点でこれは、馬琴的小説観と逍遙のそれとの喰い違いだったと言えなくもない。仁義八行を体現した八犬士の縮少再生産とも見なしうるからである。ただし馬琴は仁の体現者たる犬江親兵衛をリーダー格としたが、他の七犬士は同格に扱っていた。ところが鳴鶴は発情は智力に従わねばならず、智力は良心に制せられると、良心・智力・発情というヒェラルキーを見出し、それが三人の「挙動」だけでなくプロットの面にも生かされていると読み取ったのである。馬琴の仁義八行にはメルロー的な「発情」が欠けていることと並んで、これが『経国美談』の『八犬伝』と異る所以として、鳴鶴にはその新しさが知覚されたのであ

ろう。

だがこれはかならずしもイパミノンダスを主人公と見ることを意味しない。というより、近代文学的な主人公の概念をかれは持たず、この点に関しても馬琴の、「主客は、此間の能楽にいふシテ・ワキの如し。その書に一部の主客あり、又一回毎に主客ありて、主も亦客になることあり、客も亦主にならざることを得ず」という観念に近かったと思われる。後篇第十三回の尾評に「此回。以二阿善一置二主位一。以二斎武一置二賓位一。」という言葉があり、主賓という用語自体は馬琴がヒントを得たと言われる毛声山の『読三国志法』とおなじだが、概念は馬琴により近いからである。それによれば能楽のシテとワキのごとく、主客とは客あっての主という、一対の、切り離せない関係にあり、しかも場面によってこの関係は交換しうるものであった。前篇を通じての主役（リーディング・アクター）がペロピダスであることは一読して明らかだが、ある場面でメルローなりレヲナなりに焦点を合わせて集中的に筆を費すならば、かれらがその時の主役となりペロピダスは傍に退く。このような主客の相互転換という相対化の視点があればこそ鳴鶴は近代的な主人公観とは別な基準で、前篇においてはほとんど活躍することのなかったイパミノンダスを以てペロピダスを相対化しえたのである。「是発情為二智力所一レ制者……是良心制二智力一者也」とは、時にペロピダスがメルローの主となり、時にはイパミノンダスの客となるということはほかならない。

このような主客観が照応や反対などの構成論と深く結びついていたことは言うまでもないであろう。「又反対は、その人は同じけれども、その事は同じからず」とは、主客が入れ代る場合をも意味する。しかも漢詩における対句的な法則に従ってある場面と照対するもう一つの場面を作らねばならないとすれば、主要な登場人物もまたそれに準じて主客のいずれをも演じ別けねばならない。そういう場面ごとの役割を超えてペロピダスをペロピダスたらしめ、イ

パミノンダスをイパミノンダスたらしめる理念を龍渓は与えていた。鳴鶴はそのように読み取って、「是通篇之大主眼」と評したのである。

龍渓がはじめからこのような構成論を意識していたかどうかは分からない。だが読本体を志向していた以上、鳴鶴のような批評はけっして意に反するものではなかったであろうし、後篇においては意図的にそれに従ったと思われる。ことさら前篇と照対させるために作った場面、と判断できる箇所が随所にみられるからである。例えば前篇におけるペロピダスとレヲナの恋はついに成就しなかったのだが、後篇ではイパミノダスの家に寄遇したゴウキスと結婚する。ペロピダスの出陣に際してその妻が「御身ヲ危ヲクシ玉フナ」と案じたのに対して、「何故ニ一軍ヲ危クシ玉フナト戒メザルヤ」("Private men, my wife, should be advised to look to themselves, generals to save others")とペロピダスが答えたエピソードが、『プルターク英雄伝』に紹介されており、龍渓としてもこの場面を描くに当って妻を配しておく必要があったわけだが、わざわざ侍女が女主人の結婚を懸念する会話までも描き込んだのは、前篇との照応を配慮したからであろう。

また前篇では獄中に囚われたイパミノンダスをペロピダスの従者アンヂュウスが救出するわけだが、後篇ではヒーリー王アレクサンドルに捕われたペロピダスを、イパミノンダスが兵を率いて救出に向った。鳴鶴はわが意を得たりとばかりに、「巴氏繫獄一節。与二前篇威氏幽囚一節一。遙相対映」と評した。こうしてみると鳴鶴たちの尾評は一般の読者に対してだけでなく、龍渓に対してもまた小説作法上の教育的効果を及ぼしていたのである。

ただその間にも「見エタリシ」とか「見エニケリ」とかと一いち細かく見え方を言表化せずにいられない龍渓独特

の表現特徴は少しずつ増えている。それを表現史的にとらえるならば、馬琴における「主」は、その場面の主導的な役割を演ずる人物であるとともに表現の焦点でもあった。が、その両面を区別し、表現の焦点たる人物とその場面の主役とをずらし、しかも焦点的な人物のほうを一貫してどの場面にも登場させるならば、かれを視点人物として定立したことになるだろう。日本の近代小説はその方向に進んでゆき、そこに視点人物のアイデンティティとしての性格イメージが生れることになった。龍渓がその流れに加わるのは『浮城物語』からであるが、右のような見え方の言表化はそういうずらしの萌芽だったと言える。ペロピダスとレヲナの再会を描いて、傍のメルローに「夫婦ノ様ナラン」と大声で呟かせ（後篇第一回）、「乱民」に殺されたレヲナの死骸と対面したペロピダスの姿を、傍の衆士官の眼を借りて「身ハ一軍ニ将トシテ衆士官ノ前ニ在レハ眼瞼一滴ノ涙ヲ溢レシメス唯其ノ黙シテ愀然タル哀容ハ特ニ傷マシク見ヘルナルヘシ」（後篇第三回）と描き出した。このような傍役的人物への視点の仮託は、ペロピダスとレヲナという「主客」に焦点が向けられていることの意識的な強調であるが、そういう視点操作の自覚もなしに主役の言動に言葉を費していた同時代の表現から一歩抜け出していた徴候であり、逍遙の『当世書生気質』における視点の強調を準備する表現だった。主役ならぬ焦点人物の出現の萌芽なのである。

このことを確認してもう一度先のエピソードにもどるならば、ペロピダスの出陣に際しての妻との会話はもちろん場面的な拘束が大きい。出陣以外の場合に用いることはむずかしいだろう。だが場面それ自体を動かすことは可能であって、場合によってはセーベ回復の暗殺計画に出発する際のレヲナとの会話とすることさえ出来よう。その意味では場面それ自体が可変項なのであり、他方イパミノンダスのペロピダス救出行は時期を動かすことができないという点で不可変項であった。つまり馬琴的な構成論というフィルターにかけてみれば、照応や反対などのために操作しう

る共時的な可変項と、伏線や襯染という通時的系列にある不可変項とに分離できる。ハイデン・ホワイトが言う歴史上の出来事とは主に後者を指していたのであって、だからこそかれはその出来事の選択や焦点の置き方、あるいは叙述のレベルにおける順序の入れ替えというプロット化を問題にしなければならなかったのである。換言すればホワイトの言う出来事それ自体が既にある種のフィルターを通して選択された「事実」だったということにほかならない。

もしこのように分離された可変項のエピソードのみを集めてみれば逸話集が生れる。それを評伝伝記の形で通時的に配列した場合、不可変項の「事実」はその人物の時代的背景として共時化される。その逆に不可変項の通時的な配列（またはそのプロット化）によって「歴史」を叙述する場合、そこに登場した人物の可変項的なエピソードは共時化され、かれの回想や内面性として喚び出されることになるだろう。その意味で可変項と不可変項とのいずれに主眼を置くかによって共時性と通時性とは交換されうるのであり、前者を主とすれば評伝、後者を主とすれば歴史小説、そして後者のなかで前者の比重を出来るかぎり零項化していった形で「客観的」な歴史が書かれる、というように日本における歴史ナラティヴのジャンルが分化してきたのである。

結　読者の反噬

逍遙は『小説神髄』で二度『経国美談』に言及した。一度は既にふれたように正史中の人物の理念化に関するこだわりであり、もう一度は上巻の「小説の種類」で「政事小説ハ専ら政事界の現況を写しいだして暗に党議を張らまくする政事家の手になれる者多し「美イコンスヒヰルド」候の春鶯囀矢野文雄大人の纂訳せられし経国美談など其例な

り」と言及したのであるが、再版から『経国美談』の名は消してしまった。かいなでの政事（治）小説とは類を異にする作品だという判断が生じたためであろうが、それならばどんな種類に入れるべきか、迷ってしまったらしいのである。

登場人物の理念化については、これは間接的な言及であるから残しておいたのであろう。ただいずれにせよ取るに足らぬ作品として黙殺しようとしたのでないことは、下巻の構成自体が雄弁に語っている。その文体論は龍渓のそれから示唆された点があったと見ることができるが、「脚色の法則」でまず馬琴の小説七則の全面的な検討と批判に取り組んだのも、鳴鶴的な読みの背後にある構成論を撃っておく必要を感じたためと思われる。『八犬伝』への関心は早くからあったようだが、小説七則の批判が緊急の課題として意識されるに至った直接的なきっかけは『経国美談』だったと考えられるのである。かれは脈絡通徹を重視する立場で伏線と襯染とは評価し、だが照応や反対などは巧みを求めすぎる寄り道として斥けた。これはもちろん主人公観にもかかわってくる。かれが脈絡通徹を小説構成の基本条件とみた理由は、また稿を改めて探ってみなければならないが、強いて馬琴との違いを主張する仕方のなかに『経国美談』からの圧力を想像することができる。その名前を『小説神髄』から消そうとしたのはそういうこだわりを裏返した行為と見るほかはないであろう。

その反面かれは「正史」という言葉をそのまま受け継いでいる。ある王朝の史官が、その前代の（つまりかれの王朝が奪って代った）王朝の権力内部の記録を整理し興亡の経緯を明かしたもの、それを正史の原義とするならば、龍渓の『経国美談』中の「歴史」はむしろ頼山陽に倣って「外史」と呼ばなければならない。にもかかわらず龍渓が材料としたギリシャ史を「正史」と呼んだのは、セーベの興隆を支えた民主制こそ正統的な権力のあり方だと考えたた

めかもしれないが、逍遙はさらにその概念を拡げて歴史（記述）一般の意味に使っていた。その上でかれは正史と小説との関係を、龍渓の纂訳と補述の関係とは別様にとらえて、正史の裏面あるいは正史中の人物の内面を強調した。龍渓の補述を承知した上でなおかつ『経国美談』全体を「正史」的世界と受け容れた読者層を想定してみるならば、逍遙がそれとの差異化として裏面や内面を強調した理由がよく分かるのである。

その意味で逍遙は『経国美談』の読者の一人であり、しかもきわめて例外的な読者だった。かれはあの尾評に代表されるような仕掛けそのものにはかならずしも眼を向けなかったが、少くともその小説に関する教育装置からは免れえた読者だったからである。この点にかぎりかれは自由な、解放された立場を取りえた読者であった。ばかりでなく、この立場から『経国美談』というテクストが喚起する小説論上の諸問題を多角的、全面的に再検討しようとした読者でもあった。『小説神髄』の全体の意図がそうであったとはもちろん断言できないが、こと下巻に関するかぎりそれは『経国美談』を暗黙の批判対象とした小説作法論であり、別様な読者教育の試みだったとみてさしつかえないのである。

それはまた評論が鳴鶴的な実作批評から離脱する、いや離脱しようとして「自律」化してしまった評論の、日本的な経緯を物語るテクストの誕生でもあった。

註一　この箇所を岩波文庫『経国美談　下』（昭和四四年七月刊）の校訂者小林智賀平は以下のように読んでいる。「此書於レ君固講レ文三余。戯然其有レ補三於世教人心一。」

註二　この箇所を小林智賀平（同前）は以下のように読んでいる。「則可レ知二書中所レ叙。然尋常小説家之言及二其書出一果有三識者定評二」

註三　この箇所を小林智賀平（同前）は以下のように読んでいる。「此書雖レ謂二遊翫之具一、其所レ説無レ然経綸之資。」

註四　「間作者性と間読者性および文体の問題」（北大国文学会編集『国語国文研究』第八九号、平成三年七月刊）。

註五　花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール――方法論の試み――』（昭和六十年九月、風の薔薇社刊）。

註六　Connop Thirlwall "A History of Greece" においては、道徳的評価と客観性との関係が次のように意識されていた。

> But though we would not neglect the moral and religious side of the subject, there are some others which it will be fit to notice, and which Xenophon appears studiously to have kept out of sight.

これはスパルタ軍のセーベ占領について、セノホンがスパルタ側の立場で弁護的に書いていたのに対して、道義的視点から批判し、さらにセノホンが慎重に避けていた事実に注意を促そうとした箇所である。

註七　Hayden White "Tropics of Discourse" (The John Hopkins University Press, 1978)。

註八　セノホンの『ギリシャ事件史』(Xenophon "The Affairs of Greece." translated by William Smith. 1876, William P. Nimmo) はスパルタ側の感情を考慮したためか、ペロピダスの名前は出さず、代りに Mello の役割をクローズアップしている。これは他のギリシャ史における Mellon と同一人物と思われるが、龍渓の描いたメルローとはキャラクターが異なる。

註九　註四とおなじ。

註十　田村すゞ子他訳『一般言語学』(昭和四八年三月、みすず書房刊)。

註十一　Hayden White "Metahistory" (The John Hopkins University Press, 1973)。

註十二　この「第八回」は鳴鶴の勘ちがい。正しくは第七回。

註十三　馬琴がヒントを得た毛声山の『読三国志法』に眼を通していたことも考えられるが、用語・概念ともに馬琴のほうに近い。

（一九九一・九・三十）